

[目次]

日本生態学会各賞候補者募集	1
第 63 回日本生態学会大会案内	5
第 62 回日本生態学会（鹿児島大会）総括	10

記事

I. 一般社団法人日本生態学会平成 27 年度第 2 回定時総会、全国委員会、 各種委員会において報告・承認・決議された事項	12
A. 報告事項	
B. 承認事項	
C. 決議事項	
II. 第 62 回日本生態学会大会記録	27
III. 書評依頼図書	30
IV. 寄贈図書	31

お知らせ

1. 公募	31
-------------	----

書評	31
----------	----

公募カレンダー	33
---------------	----

京都大学生態学研究センターニュース	34
-------------------------	----

日本生態学会各賞候補者募集

第14回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本学会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第20回「日本生態学会宮地賞」

生態学に大きな貢献をしている本学会の若手会員に対して、その研究業績を表彰することにより、わが国の生態学の一層の活性化を図ることを目的とするものです。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として3名の受賞者を選考し、「日本生態学会宮地基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

第9回「日本生態学会大島賞」

例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、「日本生態学会大島基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

第4回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として3名の受賞者を選考し、「日本生態学会鈴木基金」から各々5万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<http://www.esj.ne.jp/>) よりダウンロード
3. 送付先：〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
(〇〇は応募する賞名を入れて下さい)
4. 締め切り日：2015年8月15日（必着）

日本生態学会賞細則

- 第1条 日本生態学会賞は、本学会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下委員会）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を代議員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、総会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本学会の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この細則の変更には理事会の3分の2以上の同意を要する。

日本生態学会宮地賞細則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下宮地賞という）は、生態学の優れた業績を挙げた本学会の若手会員で、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を代議員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、総会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公

表する。

第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および宮地基金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本学会の学会誌に投稿する。

第10条 この細則の変更には理事会の3分の2以上の同意を要する。

日本生態学会大島賞細則

第1条 日本生態学会大島賞（以下大島賞という）は、例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。

第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や会員歴にも留意する。

第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を代議員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、総会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および大島基金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本学会の学会誌に投稿する。

第10条 この細則の変更には理事会の3分の2以上の同意を要する。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）細則

第1条 日本生態学会奨励賞（以下奨励賞という）は、本学会の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。

第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。

- 第5条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を代議員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、総会の上承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および鈴木基金より賞金5万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本学会の学会誌に投稿する。
- 第10条 この細則の変更には理事会の3分の2以上の同意を要する。

第 63 回日本生態学会大会（仙台）案内

第 63 回日本生態学会大会（公式略称 ESJ63）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。

連絡先

〒 980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-3 生命科学研究科
第 63 回日本生態学会大会（ESJ63）実行委員会
担当：中静透（大会会長）、占部城太郎（大会実行委員長）
大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/63/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページからリンクしている問い合わせページからお願いします（学会事務局にお問い合わせいただいても対応できません）。

大会に関する最新情報は、大会公式ホームページで確認して下さい。

日程・会場

2016 年 3 月 20 日（日）～ 24 日（木）
仙台国際センター（<http://aobayama.jp>）
仙台市情報・産業プラザ（<http://www.siip.city.sendai.jp/netu/>）
詳細は次号のニューズレターでお知らせします。

提案・申込の受付開始・締切

【受付開始】

シンポジウム企画提案 2015 年 5 月 27 日（水）から
英語口頭発表賞エントリー 2015 年 7 月 1 日（水）から
他の申込み 締切の 1 ヶ月程度前から

【締切】

講演者・企画者で新規に入会（未納退会で再入会を含む）する方の入会申込

2015 年 10 月 22 日（木）17:00

（入会手続き <http://www.esj.ne.jp/office/member/index.html> を参照）

上記の方の 2016 年学会費入金

2015 年 10 月 22 日（木）入金分

シンポジウムの企画提案	2015 年 8 月 27 日（木）17:00
英語口頭発表賞エントリー	2015 年 9 月 1 日（火）17:00
企画集会申し込み	2015 年 11 月 5 日（木）17:00
自由集会申し込み	2015 年 11 月 5 日（木）17:00
一般講演申し込み	2015 年 11 月 5 日（木）17:00
講演要旨登録	2016 年 2 月 3 日（水）ごろ 17:00（未確定）
一般講演口頭発表用ファイルの登録	大会の数日前

※スケジュールに変更の可能性がありますので、適宜、大会公式ホームページで確認ください。

※すべての締切に関して、締切後の追加や修正等の依頼には、対応できません。

大会参加資格一覧

会員種別ごとの参加資格は以下の通りです。なお講演の重複制限については、各集会および一般講演の詳細をご覧ください。

講演種別 \ 会員種別	正会員	非会員
一般講演（口頭・ポスター）	○	
シンポジウム企画	○	
シンポジウム講演	○	○
シンポジウム・企画集会・自由集会のコメンテータ *1	○	○
企画集会企画	○	
企画集会講演	○	○ *2
自由集会企画	○	
自由集会講演	○	○

*1 要旨を登録しないコメンテータ。要旨登録を行うコメンテータの資格は「講演」に準じます。

*2 大会企画委員会・大会実行委員会が特別に認めた場合に限り、集会あたり1件まで可能です。

- ・非会員が講演・企画を希望される場合は、2015年10月22日（木）までに2016年の入会を申し込むとともに、2016年の学会費を納入して学会員となって下さい（会費滞納による退会者の再入会の場合も同様です）。
- ・高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」に参加される高校生（中学生含む）については、「みんなのジュニア生態学」の案内をご覧ください。
- ・非学会員でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴衆として参加できます。

大会参加費・懇親会費

- ・大会参加費・懇親会費は、学会費と別に納入していただきます。詳しくは、次号のニュースレターでお知らせします。
- ・学部生の参加を促進するために、大会参加費の大幅な割引もしくは無料化を検討中です。
- ・自由集会のみに聴衆として参加する場合には、大会参加費は不要です。

公開講演会

日本生態学会第19回公開講演会「生態学から見た東日本大震災」

日時：2016年3月20日（日）13:00～16:00（予定）

会場：仙台市情報・産業プラザ多目的ホール

内容の詳細については、次号のニュースレターでお知らせします。

シンポジウムの企画案の公募

ESJ63では、大会シンポジウムの企画案を会員から募集します。大会の中心となる集会ですので、下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。シンポジウムの開催時間は約3時間の予定です。大会シンポジウムの企画は2015年8月27日（木）17:00までに大会公式ホームページからご提案下さい。

【企画内容について】

- ・大会参加者は、毎年多様なテーマに関するシンポジウムが開催されるとともに、それまでにはなかった新鮮なテーマのシンポジウムが開催されることを期待しています。大会企画委員会は、シンポジウム企画経験の少ない方からの企画提案を歓迎します。
- ・主な講演者がおおよそ決まっている企画案をご提案ください。
- ・他分野との交流を深めるため、生態学会会員以外の方に招待講演をしていただくことも可能です。招待講演者の参加費は無料となります。
- ・若手研究者からも意欲的な提案を期待しています。

【英語使用について】

- ・日本生態学会では、留学生や海外からの研究者による大会参加が増えています。今後もさらに大会参加者どうしの研究交流が進むことを目指して、ESJ63では、シンポジウム・集会等における英語の使用（日本語との併用を含む）を奨励します。

- ・英語で開催されるシンポジウムは優先的に条件の良い部屋に割り付けます。
- ・日本語で開催されるシンポジウム・集会では、可能な範囲で、スライドでの英語の併記や簡単な英語版ハンドアウトの用意などの工夫をお願いします（ハンドアウトや二か国語スライド等は、英語開催のシンポジウム・集会において非英語話者の参加を促すのにも有効です）。
- ・ESJ63では、シンポジウムで講演する海外研究者のうち1名以上を *Ecological Research* 誌による招聘講演者として採用予定です。招聘講演者は旅費の支給を受ける事ができ、大会参加費も無料となります。大会後にシンポジウム内容に関連したレビュー論文もしくは特集論文などを *Ecological Research* 誌に投稿していただくことが原則となります。

【企画案の採用について】

- ・大会企画委員会は応募された企画案を検討し、大会全体のバランスに配慮して、採択する提案を決定します。
- ・採択された企画の提案者には企画者（オーガナイザー）としての参加を要請します。
- ・大会企画委員会はコーディネータを出して各シンポジウムの企画運営を支援し、シンポジウム間の調整を行います。
- ・企画案が多数寄せられ会場のキャパシティを超えてしまう場合や、内容的にシンポジウムとしての開催が難しいと判断される企画がある場合は、企画集会や自由集会として再提案していただくことがあります。

【応募の制限について】

- ・企画者は日本生態学会正会員に限ります。非会員は企画者（企画の責任者および連名の共同企画者を含む）になれません。
- ・異なるシンポジウム間で重複して企画者または講演者となることはできません（「講演者」は「講演の主たる説明者」を意味します。以下同様）。企画段階で重複が確認された場合には、コーディネータを通じて調整をお願いします。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は企画集会の企画者・講演者になることはできません。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者にもなれません。
- ・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は1講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えません。

企画集会と自由集会

ESJ63では、企画集会と自由集会を募集します。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。企画集会・自由集会ともに、企画者は日本生態学会正会員である必要があります。企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに個人および団体を誹謗中傷する内容などを含むと判断されるものについては、その限りではありません。

【企画集会】

- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・企画集会の企画者・講演者はシンポジウム及び他の企画集会の企画者・講演者となることはできません。
- ・企画集会の企画者・講演者は一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者にもなれません。
- ・企画集会での講演者（主たる説明者）は原則、日本生態学会正会員に限定されます。非会員による講演は、特に事情があり企画提案時にその理由を記載した場合のみ、企画あたり1件まで認められます。ただし、同一の非会員が2年連続で、企画集会で講演することは認められません。
- ・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は1講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えません。
- ・限られた会場を平等に分け合って使用するため、企画集会はできるだけ3人以上の講演者で構成して下さい。

【自由集会】

- ・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかしあくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。
- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの重複発表は認められますが、原則として日程の調整は行いません。
- ・大会の正式行事ではありませんので、会場は集会主催者が責任をもって管理して下さい。

【応募要領】

企画集会または自由集会の開催を希望される方は、2015年11月5日（木）17:00までに大会公式ホームページからお申し込み下さい。企画集会については、集会の提案・概要登録時に、講演者および共同発表者と講演タイトルも併せて登録します。また、企画集会・自由集会の企画者、および企画集会の講演者は、集会提案時までに大会への参加登録を済ませて登録番号を取得しておくことが必要です。これらの締切はすべて11月5日（木）17:00です。ご注意ください。

【企画集会と自由集会の採否について】

- ・企画集会は、自由集会に優先して採択されます。提案された集会（企画集会・自由集会）の数が会場の収容可能数を上回る場合には、全部の自由集会の開催を取りやめても会場が足りない場合にのみ抽選を行い、企画集会の採否を決定します。
- ・自由集会の提案数が会場の収容可能数を上回る場合には、同一会員が重複して複数の集会（自由集会・企画集会）の企画者となっている自由集会を不採択とします。次に、大会シンポジウム企画者による自由集会を不採択とします。それでも数が多い場合には、抽選で自由集会の採否を決定します。
- ・限られた場所と時間を分け合って使うため、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は自由集会の企画を可能なかぎりご遠慮下さい。2つ以上の自由集会の企画・講演もご遠慮下さい。
- ・開催の可否については、11月17日（火）までにメールでご連絡します。

大会シンポジウム・企画集会・自由集会の違いは以下の通りです。

	シンポジウム	企画集会	自由集会
位置づけ	大会の核となる集会。大会の正式行事。	シンポジウムに次いで核となる集会。大会の正式行事。	様々な話題を自由に議論できる場。大会の正式行事ではありません。
開催時間	約3時間	約2時間	約2時間
開催の優先度	最優先されます。	シンポジウムの次に優先されます（自由集会の開催を全て取りやめても会場が足りない場合のみ、抽選で採否を決定します）。	優先されません（会場が足りない場合は抽選で採否を決定します）。
日程・時間	最優先されます（聴衆の集まりやすい日時に割り当てられます）。	シンポジウムの次に優先されます。	優先されません。
企画運営段階での企画委員会の関与	関与します。企画委員がコーディネータとして企画運営を支援します。内容の重複がみられる場合、複数のシンポジウムの合体を勧めることがあります。	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。
企画者の資格	正会員	正会員	正会員
非会員による講演	奨励します（審査の上、招待講演者として参加費を免除します）。	集会あたり1件まで可（同一非会員の2年連続は不可）。大会参加費を支払う必要があります。	認められず（自由集会での非会員講演者が大会の他行事に参加する場合には、大会参加費を支払う必要があります）。
海外からの招待講演者への学会からの旅費支給	大会全体で1名以上認められます。	なし。	なし。
一般講演との重複発表	不可	不可	可
他集会との重複発表	自由集会・フォーラムのみ可能。	自由集会・フォーラムのみ可能。	全て可能。
提案締切日	8/27（木）	11/5（木）	11/5（木）
概要登録/集会の概要及び講演者（主たる発表者及び共同発表者）と発表タイトルの登録締切日	11/5（木）	11/5（木）	11/5（木）
プログラムおよび要旨集への掲載内容	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	集会概要のみ掲載されます。

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企

画やフォーラムでの話題提供は、重複発表制限の対象となりません。

一般講演

- ・一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。
- ・発表内容に応じて会場・時間の割り振りをいたしますので、発表申し込み時に適切な分野を選んでいただきます。ESJ63における発表募集時の分野の区分については、現在、企画委員会で検討しており、決定次第ホームページでお知らせしますので適宜ホームページでご確認下さい。なお、応募状況に応じて募集時の区分は統廃合されますので、大会開催時の分野区分は募集時のそれと異なる可能性があります。予めご了承下さい。
- ・口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。また、英語による発表を集めた「英語口頭発表枠」を選ぶこともできます（発表内容に応じた分野分けも行います）。この場合は、下記の「英語口頭発表賞」にエントリーした発表と共にセッションを構成します。

注意：

- ・一般講演の演者は、日本生態学会正会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
- ・1人で2つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承下さい。

高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」

- ・日本生態学会は、生態学の社会への普及のため、アウトリーチ活動の一環として、高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」を実施しています。第62回鹿児島大会では、学年末の多忙な時期にもかかわらず、3月21日（土）に29件の発表があり、最優秀賞、優秀賞等たくさんのポスターを表彰しました。引き続き、第63回仙台大会でも高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」を開催します。
- ・高校生（中学生も歓迎です）にポスター発表をしていただき、生態学諸分野の専門家や学生、他の参加校との交流を通して、生態学全般への関心をさらに高めていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。既に他の学会等で発表された研究の場合、そこからどのように発展したのかを含め、研究の集大成・経過報告としてご発表ください。参加費は無料です。
- ・前回に引き続き、高校生ポスター発表会に参加した高校生と若手研究者との交流会「みんなのジュニア生態学講座」も企画します（1時間30分程度）。2～3名の若手研究者に話題提供をお願いし、どのような中学・高校時代だったか、研究者を目指したきっかけは？等のエピソードも含めて、ご自身の研究を語ってまいります。質問時間を十分に設けますので、ご期待ください。
- ・開催日時や参加申込み・要旨登録・授与される賞等の詳細については、次号のニュースレター／日本生態学会公式HP／全国規模のML等で配信しますので、ぜひお知り合いの高校教員や高校生に周知していただきますよう、よろしくお願ひします。

英語口頭発表賞

ESJ63では、第3回英語口頭発表賞を実施します。賞の目的は、大会における英語による研究発表を振興し、留学生や国外からの参加者との議論の場をより多く作ることです。特に若手研究者のコミュニケーション能力と国際的情報発信力を高める機会を増やすことを重視しています。参加される方は英語口頭発表賞ホームページを見て9月1日までにメールで申し込んで下さい。また、賞に該当しない「非若手研究者」の方の一般講演も別途募集しますので、ふるってご参加ください。みんなでちょっとした国際交流してみませんか？ チェケラ！

<https://sites.google.com/site/esj63engpresenawardjp/>

ポスター賞

ESJ63では、若手（学位未取得者）の研究を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター発表では、日本語を理解しない参加者への配慮を強く推奨します（英語併記や英語別刷りの用意など）。ポスター賞の運営、応募資格、審査方法などについては、次号のニュースレターに掲載します。

エコカップ2016

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ2016が行われます。主催はエコカップ2016実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

第 62 回日本生態学会大会（鹿児島）開催報告

吉田丈人（鹿児島大会大会企画委員長）

鹿児島大会（ESJ62）は、2015年3月18日（水）～22日（日）に、鹿児島大学および鹿児島市民文化ホールで開催されました。大会のもっとも重要な成果は、生態学に関する幅広い学術的な交流や生態学者自身の学びや経験の機会提供だと思いますが、その評価は参加者の皆さんにお任せするとして、ここでは、これらの機会を提供する場として、鹿児島大会がどのように運営されたかを簡単に報告します。すべての大会運営関係者による報告をまとめることは難しく、ここには書ききれないご苦労があったことと思いますが、どうぞご容赦ください。

毎年の大会は、開催地の地区会で組織される大会実行委員会、定常的な学会組織である大会企画委員会、学会事務局、および、学会執行部によって、企画運営されています。鹿児島大会では、鈴木英治大会会長・山本智子大会実行委員長をはじめとする大会実行委員会は24名（アルバイト含まず）、大会企画委員会は6部会68名で組織されました。そのほかにも、各種発表賞の審査委員（下記の謝辞参照）やアルバイトなど、数多くの方々を支えられて、鹿児島大会は予定通りに終了しました。この場を借りて皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。お疲れ様でした。

鹿児島大会の参加者は、一般・学生・学部学生以下参加者1943名、高校生115名、招聘・招待講演者36名で、計2094名（自由集会のみ参加者・公開講演会のみ参加者を含めず）となりました。大会の基本的な枠組みはこれまでの大会を踏襲し、シンポジウム12件、一般講演1032件（口頭発表136件、ポスター発表866件（ポスター賞応募402件）、英語口頭発表30件（賞応募数））、フォーラム11件、企画集会19件、自由集会29件、高校生ポスター発表29件となりました。このうち、英語での発表は一定の割合であり、すべての時間帯で英語発表があるまでには至りませんが、大会の国際化はここ数年で着実に進みつつあります。また、高校生ポスター発表に加えて、「みんなのジュニア生態学講座：高校生と若手研究者の交流会」が新たに開催され、次世代の育成に向けた取組みも進んでいます。さらに、公開講演会「南西諸島の生物多様性、その成立と保全」が開催され、講演内容をまとめた冊子「エコロジー講座8」と合わせて、生態学の社会への発信もされました。また、非会員による招待講演も多く、ほかの学術分野や行政や民間会社などの関係者との交流もありました。一方、数多くの講演の内容は多岐にわたっており、一般講演の発表分野は今回統合されたものの22分野にもなり、生態学の幅広さを改めて実感できたと思います。さらに、学会の各種の委員会や理事会によって、日頃の委員会・理事会活動に関連したさまざまな内容のフォーラムが開催され、学術的な交流だけでなく、広い意味でのキャリア教育が実

施されたり、社会貢献が議論されました。また、大会参加者の交流の場として、数々の薩摩料理や地酒が振る舞われた懇親会も開催されました。加えて、二カ所に分散した会場の使用計画と諸々の管理運営、託児室やファミリー休憩室の開設と運営、企業などの展示、収支計画や出納管理の会計、想定される万一の事態に備えての危機管理体制、昼食や買い物などに便利なマップ配布など、目に見える所も見えない所も、細部にわたる配慮がなされて大会が運営されており、そのほとんどは会員によるボランティア作業に支えられています。

持続的な大会運営に向けて

このように多くの会員ボランティアによって支えられている大会運営をよく見てみると、実は、持続性の観点では、綱渡りのような状況であることが見えてきます。たとえば、各種の集会や一般講演の申し込みをする大会登録システムは、ある会員個人によって作られていますし、そのシステムを動かしているサーバーは、また別の会員個人によって支えられています。また、大会のさまざまな運営は会員によるボランティア作業で成り立っていますが、その中には、大会運営に専念するために、本来の会員としての学会参加の機会が失われている会員も少なからずいます。持続的な大会運営とは言いがたい現在の状況は、学会執行部や多くの会員にすでに理解されており、状況を改善するための取組みが進みつつあります。

齊藤隆学会長のもとに、2つの部会がつくられています。1つは運営改革作業部会で、もう1つは大会のあり方検討部会です。運営改革作業部会は、2014年3月の広島大会で組織され、元大会企画委員長の陀安一郎部長のもと、学会執行部と事務局に加えて、電子情報委員会や大会企画委員会の現旧委員が参加しています。この部会では、会員管理と大会運営のための電子システムの改革が検討され、その導入に向けた作業が進んでいます。大会参加者にとっては、大会登録システムや参加費支払などで新しいシステムを利用することになります。大会運営関係者にとっては、持続的な大会登録システムとなるだけでなく、ボランティア作業の負担軽減につながることを期待されています。電子システムの詳細は現在検討が進んでいますが、2017年春の東京大会から導入されることが予定されています。

もう1つの大会のあり方検討部会は、上記の電子システム改革だけでは解決できない、大会運営のボランティア作業の負担軽減を中心に、今後の大会のあり方について検討を行うものです。大会のあり方検討部会は、鹿児島大会で組織され、学会執行部と事務局に加えて、大会企画委員会と大会実行委員会の現旧委員が参加していま

す（私は座長を拝命）。部会での検討は始まったばかりですが、2015～2016年の2年間で検討をまとめ、2018年春の北海道地区での大会から改革が実施できるように予定しています。大会のあり方の変更は、会員の皆さんにとっても大会運営関係者にとっても重要ですので、幅広くご意見を伺いながら検討を進めて行く予定です。

来年3月の仙台大会は、半谷吾郎大会企画委員長、中静透大会会長、占部城太郎大会実行委員長のもと、すでに準備が進んでいます。上記の電子システム改革や大会改革は今後に進みますので、仙台大会は、現在までの運営体制を継続した最後の大会となります。従来と変わらない多大なボランティア作業によって支えられる大会であることを覚えつつ、中静大会会長が懇親会で歓迎の挨拶をされたように、仙台大会が、多くの意味で成功の機会となることをお祈りしています。

謝辞

大会運営関係者に加えて、実に多くの方々に支えられて、鹿児島大会が開催されました。ここに記して、皆さんに謝意を表したいと思います。

みんなのジュニア生態学講座では、塩尻かおりさん、高橋佑磨さん、山北剛久さんの三氏に講演していただき、大変好評だった新企画を支えていただきました。

一般講演のポスター賞、英語口頭発表賞、高校生ポスター賞では、数多くの審査委員（下記参照）に時間をさいて丁寧な審査を担当していただきました。

共立出版株式会社とシュプリンガー・ジャパン株式会社には、それぞれ高校生ポスター賞と英語口頭発表賞の副賞を提供していただきました。

皆様、どうもありがとうございました。

ポスター賞 審査委員（敬称略）：

阿部晴恵、綾部慈子、安東義乃、飯島勇人、池田紘士、市野川桃子、井出純哉、井上みずき、今井伸夫、岩崎雄一、内田圭、大園享司、大谷雅人、大場孝裕、小笠真由美、奥野正樹、小長谷啓介、香月雅子、壁谷大介、川北篤、岸茂樹、木村一貴、栗山武夫、小北智之、小林慶子、小山耕平、今野浩太郎、佐伯いく代、酒井陽一郎、阪口翔太、坂本亮太、櫻井麗賀、佐藤綾、澤田佳宏、鈴木一平、清野達之、高橋大輔、高原輝彦、辰巳晋一、田中幸一、田邊晶史、千葉晋、角田裕志、鶴井香織、土居秀幸、土光智子、内藤和明、中川光、中島祐一、永田尚志、中野大助、永松大、西尾孝佳、仁科一哉、西村愛子、橋本徹、長谷川元洋、畑田彩、畑憲治、早矢仕有子、原村隆司、比嘉基紀、平吹喜彦、平山寛之、廣田峻、藤嶽暢英、古川拓哉、星崎和彦、細石真吾、松木悠、宮下彩奈、宮本和樹、山浦悠一、山岸洋貴、山田勝雅、このほか匿名の方10名

英語口頭発表賞 審査委員（敬称略）：

井鷲裕司、潮雅之、大手信人、大橋瑞江、久米朋宣、小泉逸郎、佐藤幸恵、鈴木英治、高橋一男、田中健太、辻和希、兵藤不二夫、藤井一至、Masami Fujiwara、三木健、吉村仁

高校生ポスター賞 審査委員（敬称略）：

丑丸敦史、内井喜美子、大西尚樹、高原輝彦、竹下俊治、玉田克巳、土居秀幸、中井咲織、西脇亜也、畑田彩、平山大輔、広瀬祐司、宮田理恵、山本哲史、和田直也、このほか匿名の方1名

記 事

I. 一般社団法人日本生態学会平成 27 年度第 2 回定時総会（第 62 回大会会員総会、2015 年 3 月 20 日、代議員 17 名・委任状提出代議員 3 名・会員約 150 名参加）および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 2014 年度学会誌発行状況・会員数等

日本生態学会誌 64 巻

	1 号	2 号	3 号
発行部数	2750	2740	2770
配本部数	2750	2740	2766
残部数	0	0	4

保全生態学研究 19 巻

	1 号	2 号
発行部数	1450	1450
配本部数	1426	1316
残部数	24	134

Ecological Research Vol.29

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	2500	2480	2450	2450	2460	2480
配本部数	2494	2479	2450	2449	2457	2469
残部数	6	1	0	1	3	11

配内内訳

	日本生態学会誌 64 巻 3 号		Ecological Research Vol.29 No.6		保全生態学研究 19 巻 2 号	
	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数
一般会員	2092	59	1915	61	936	26
学生会員	473	83	438	85	223	39
賛助会員	100	0	100	0	21	0
小計	2665	142	2453	146	1180	65
名誉会員	4	0	4	0	4	0
寄贈交換	52	0	37	0	55	0
購読	70	0	0	0	123	36
小計	126	0	41	0	182	36
合計	2791	142	2494	146	1362	101

会員数 ※ 2014 年より ABC 会員廃止

	2013 年 12 月末現在						2014 年 12 月末現在			
	一般A	一般B	一般C	学生A	学生B	学生C	一般	学生	合計	
北海道	177	77	19	103	27	0	403	250	128	378
東北	129	50	10	82	16	3	290	172	82	254
関東	665	348	81	264	82	7	1447	1027	331	1358
中部	248	153	35	126	33	3	598	393	130	523
近畿	292	169	30	162	70	8	731	452	244	696
中四国	141	72	8	40	19	4	284	207	68	275
九州	166	69	19	56	15	0	325	225	71	296
外国	35						35	39	0	39
小計	1853	938	202	833	262	25	4113	2765	1054	3819
賛助(旧団体)				A 82	B 21	C 4	107			100
名誉							4			4
小計							111			104
合計							4224			3923

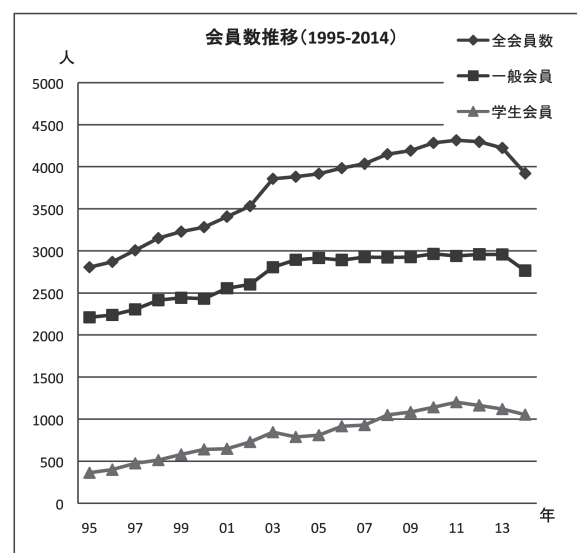
会費納入率（各年 12 月末現在）

	2013 年		2014 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	91.2	77.8	92.0	74.2
東北	91.0	73.3	90.1	70.7
関東	89.6	74.5	90.5	72.1
中部	91.5	72.8	90.6	74.6
近畿	91.2	74.6	95.4	79.0
中四国	97.3	68.5	92.3	75.0
九州	92.1	84.1	92.4	78.9
平均率	92.0	75.1	91.9	74.9

雑誌不要者数変遷（各年 12 月末）

	一般				学生					
	(AB) 会員数	生態誌不要	ER 不要		(AB) 会員数	生態誌不要	ER 不要			
2008	2725	107	4%	146	5%	1021	80	8%	85	8%
2009	2740	171	6%	215	8%	1061	148	14%	157	15%
2010	2582	321	12%	419	16%	952	221	23%	239	25%
2011	2738	371	14%	478	17%	1175	339	29%	364	31%
2012	2760	478	17%	606	22%	1135	407	36%	431	38%
2013	2757	531	19%	679	25%	1097	477	43%	501	46%
2014	2765	614	22%	789	29%	1054	495	47%	528	50%
2015 [※]	2610	628	24%	810	31%	1069	538	50%	579	54%

※ 1/26 現在



b. 庶務報告（2013 年 4 月～2014 年 3 月）

- 日本学術振興会より平成 26 年度科研費（公開講演会）について不採択通知があった（4 月 1 日）
- 日本学術振興会より平成 26 年度科研費（国際情報発信強化 A）の内定通知があった（H25 年度より 5 年間交付、H26 年度 17,600,000 円）（4 月 8 日）
- 法務局へ平成 26 年度第 1 回定時総会にて就任した理事および第 1 回通常理事会にて就任した代表理事の登記を行った（4 月 16 日）
- 文部科学省へ平成 25 年度科研費（公開講演会）実績報告書を送付した（4 月 17 日）
- 生態学琵琶湖賞運営について京都事務局にて滋賀県

- 環境政策課担当者・菊沢運営委員長・事務局鈴木で話し合いを行った（4月22日）
6. 国際情報学研究所電子化事業説明会に参加した。（4月25日）
※2016年3月にCiNii学協会誌電子化サービスが終了となるため和文2誌電子版について今後検討が必要となる。
 7. 日本学術振興会へ平成25年度科研費（国際情報発信強化A）実績報告書を送付した（5月14日）
 8. (株)ベネッセコーポレーション作製「大学入試問題データベース2014年度高校共通」への自然再生ハンドブック（2014年岐阜大入試より）の一部使用を許可した（8月26日）
 9. 収入の少ない若手会員への措置について2015年分を締切った（申請者7名）（10月31日）
 10. 生態学琵琶湖賞の募集を行った（7月28日～10月31日）
 11. 学術振興会に平成27年度科研費（研究成果公开发表）計画調査など応募書類一式を送付した。（11月12日）
 12. 学会賞選考委員に推薦された学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞（鈴木賞）候補者が代議員会にて承認された（11月24日）
 13. 独立行政法人大学評価・学位授与機構より国立大学教育研究評価委員会専門委員および機関別認証評価委員会専門委員候補者推薦の依頼があり、理事および代議員の推薦を踏まえて当学会より3名を推薦した（11月28日）
 14. 会員へ2015年会費請求を行った（12月1～5日）
 15. 平成26年度第3回定時総会をメールにて行い、第1号議案（役員を選任の件）が全会一致で承認された（1月5～9日）
 16. 平成27年度第1回通常理事会をメールにて行い、第1号議案（業務執行理事の選任の件）が全会一致で承認された（1月13～16日）
- 他、各種集会へ後援・協賛名義使用承認8件、論文図表等の転載8件。

c. 会計報告（2013年3月～2014年2月）

1. (株)地域環境計画へ会員管理システム作成費として1,050,000円を支払った（2月26日）
2. 土倉事務所へ日本生態学会費64巻1号印刷費として1,183,875円を支払った（3月31日）
3. シュプリンガーへ2014年1・2号分の出版費として5,250,000円を支払った（4月8日）
4. シュプリンガー社より2013年度売上還元金として1,550,000円及び2014年度ER編集事務費用1,950,000円の入金があった（4月25日）
5. 科研費（国際情報発信力強化）前期分として10,000,000円の入金があった（7月4日）
6. 東京化学同人より「生態学入門2版」印税として511,000円が振り込まれた（8月25日）
7. 土倉事務所へ保全生態学研究19巻1号印刷費として923,940円を支払った（9月3日）
8. 土倉事務所へニュースレターNo.33印刷費として

- 493,614円を支払った（9月3日）
9. 近畿地区会より一般社団法人口座へ2,099,759円の入金があった（9月4・5日）
10. 北海道地区会より一般社団法人口座へ1,754,940円の入金があった（9月8日）
11. 中国四国地区会より一般社団法人口座へ1,341,171円の入金があった（9月10日）
12. 土倉事務所へ生態誌64巻2号印刷費として872,964円を支払った（9月10日）
13. 九州地区会より一般社団法人口座へ1,408,244円の入金があった（10月14日）
14. 関東地区会より一般社団法人口座へ2,935,055円の入金があった（10月20日）
15. 土倉事務所へニュースレターNo.34印刷費として247,082円を支払った（11月26日）
16. 科研費（国際情報発信力強化）後期分として7,600,000円の入金があった（10月30日）
17. 東北地区会より寄付金として一般社団法人口座へ823,000円の入金があった（12月4日）
18. シュプリンガー社へEcological Research Vol.29 No.3-6編集委託費として10,007,693円を支払った（12月22日）
19. 土倉事務所へ生態誌64巻3号印刷費として1,316,304円を支払った（12月25日）
20. 土倉事務所へ保全生態学研究19巻2号印刷費として986,580円を支払った（12月25日）
21. 任意団体日本生態学会預金口座から一般社団法人預金口座への送金が完了した（12月25日）
22. テコラス(株)へサーバ年間利用料として409,320円を支払った（1月20日）
23. 2014年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。（2月16日）
24. 平成26年確定申告を行い法人税293,900円を納めた（2月25日）

2. 大会企画委員会

a. 鹿児島大会（ESJ62）概況

- ・公式集会数42件（シンポジウム12件、フォーラム11件、企画集会19件）
- ・一般講演申し込み数1,113件
口頭発表166件（内 英語口頭発表賞30件）ポスター発表866件（内 ポスター賞応募402件）
- ・高校生ポスター発表29件
- ・非公式集会数（自由集会）29件
- ・参加申込者数1417人、懇親会参加451人（JTBアマリス登録者、2月28日現在）
- ・日本生態学会第17回公開講演会「南西諸島の生物多様性、その成立と保全」
- ・企業展示・書籍販売 広告10件、展示15件
- ・託児室利用33名
- ・大会に関する問い合わせ件数127件（3月16日現在）
- ・企画委員会・実行委員会メール数 >3500件
- ・ERシンポジウム招聘講演者4名
- ・シンポジウム招待講演者20名

【鹿児島大会の運営に関するメモ】

- ・鹿児島大会の基本的な枠組みは、前回の広島大会を踏襲した。
- ・学部学生以下の大会参加費の免除を継続した。また、次世代育成の観点から、今後も参加費免除を継続することが理事会方針として示された。一方、発展途上国からの参加者の大会参加費については、今後の検討課題として残った。
- ・公開講演会のための科研費は不採択であったが、学会の公益事業として重要であるので、学会経費（大会経費）から支出して開催されることが理事会で認められた。
- ・エコロジー講座（公開講演会の出版物）については、鹿児島大会では、3年後にPDFを学会ウェブサイトでも無料公開することとなった（それまでは南方新社が販売）。今後の大会においても、大会ごとの事情に応じて、できるだけ速やかに無料公開していくことが、理事会で確認された。
- ・広島大会の出展企業へアンケートを実施し、展示場所や協賛金についての意見をもらった。協賛金については、今後も出展いただく継続性の観点から、数年前のレベルに減額された。
- ・大会企画委員会の作業に必要な経費（アルバイト・印刷など）を、委員会経費として予算要求した。
- ・ビザ申請の手続きについては、学会事務局が対応することが継続された。
- ・危機対応（大会の中止、延期、スケジュール変更などを要する非常事態）については、広島大会時につくられた齊藤会長私案を継続することが理事会で確認された。医務室・診療所、休憩室、救急車両誘導、AED、桜島噴火対応については、実行委員会により入念に対応されている。
- ・ポスター発表と英語口頭発表では、生態学会に書評依頼のために寄贈されたが書評申し出が1年以上なかった書籍を、副賞として提供した。ポスター発表では40冊ほど英語口頭発表では10冊ほどが必要であるが、寄贈本は1年に20冊ほどしかないため、毎年同様の副賞を提供することはできない。何らかの工夫が必要な状況。
- ・高校生ポスター発表では、共立出版から副賞として書籍が提供され、学会から礼状を送ることとなった。

【運営改革作業部会】

会員管理と大会運営のための電子システムの導入と改革が、現在検討されている。大会登録システム（通称竹中システム）は、2017年の東京大会から新しいシステムに更新される予定。また、電子システムの改革に伴って、大会運営における業者と学会事務局の作業分担が拡大する予定。メンバーは、陀安（座長、元大会企画委員長）、池田（会計担当理事）・吉田（大会企画委員長）・川北（大会企画委員・次次期大会企画委員長）・竹中（電子情報委員長）・富田（電子情報委員）・久米（前企画委員長・ER編集委員長）・半谷（次期大会企画委員長）・岡部（専務理事）・鈴木（事務局）・橋口（事務局）・石井（庶務担当理事）、オブザーバー：齊藤（会長）・陶山（前専務

理事）・可知（次期会長）。

【大会のあり方検討部会】

持続的な大会運営のため、会員によるボランティア作業への依存をできるだけ抑制するよう、大会のあり方を検証する。また、上記の電子システム改革により、学会事務局・大会企画委員会・大会実行委員会・委託業者の間での作業分担のあり方が変化することも、今後の大会のあり方において考慮する必要がある。これらの諸事情を考慮し、現在の大会のあり方を検証しつつ、大会運営の具体的な改革案をまとめる。具体的な大会運営の改革は、2018年の北海道大会での実施を目指す。メンバーは、大会企画委員会関連（北村、山本、横溝、丸山、和田、三木、吉田（座長））、大会実行委員会関連（山本（再掲）、関川）、学会執行部（齊藤、岡部ほか）、学会事務局（鈴木、橋口）。

b. 仙台大会（ESJ63）準備状況

- ・第63回日本生態学会仙台大会は、2015年3月20日（日）～24日（木）の期間に、仙台国際センター・仙台市情報産業プラザにおいて開催。東北地区会員により実行委員会（中静透大会会長・占部城太郎大会実行委員長）が組織され、半谷吾郎大会企画委員長とともに、次期体制への引継ぎ・調整を始めている。

c. 東京大会（ESJ64）準備状況

2016年3月に早稲田大学にて、小泉博大会会長、関川清広実行委員長、川北篤企画委員長の体制で開催予定。（文責：吉田丈人）

3. Ecological Research 刊行協議会

日時：2015年3月18日（水）13:30 - 15:30

場所：鹿児島大学郡元キャンパス共通教育棟1号館131（D会場）

出席者：久米篤（EIC）、鈴木準一郎（ME）、大手信人、小野田雄介、金子信博、熊谷朝臣、齊藤隆、陀安一郎、辻和希、露崎史朗、富松裕、野田隆史、三木健、山浦悠一、（以上 AEIC）

飯島勇人、菊澤喜八郎、北村俊平、工藤岳、佐藤一憲、陶山佳久、仲岡雅裕、中路達郎、奈良一秀、兵藤不二夫、平田竜一、福井学、松崎慎一郎、村岡裕由（以上 HE）角田智詞（Copy Editor）

平口愛子（シュプリンガー・ジャパン）、青島裕子（EC）

議題：

a. 事務局報告

- ・編集状況について
- ・編集委員の交代について
- ・出版社報告（シュプリンガー・ジャパン 平口氏より）

b. Ecological Research Paper Award 2014 受賞論文について

受賞論文（全5編）

1) Fumikazu Akamatsu, Yaeko Suzuki, Rumiko Nakashita, Takashi Korenaga

Responses of carbon and oxygen stable isotopes in rice grain (*Oryza sativa* L.) to an increase in air temperature during grain filling in the Japanese archipelago, Issue1, p. 45-53

- 2) Elena Cristóbal, Sergio Velasco Ayuso, Ana Justel, Manuel Toro
Robust optima and tolerance ranges of biological indicators: a new method to identify sentinels of global warming, Issue1, p. 55-68
- 3) Mitsutoshi Umemura, Chisato Takenaka
Biological cycle of silicon in moso bamboo (*Phyllostachys pubescens*) forests in central Japan, Issue3, p. 501-510
- 4) Vladimir G. Onipchenko, Alii M. Kipkeev, Mikhail I. Makarov, Anna D. Kozhevnikova, Victor B. Ivanov, Nadejda A. Soudzilovskaia, Dzhamal K. Tekeev, Fatima S. Salpagarova, Marinus J. A. Werger, Johannes H. C. Cornelissen
Digging deep to open the white black box of snow root phenology, Issue4, p. 529-534
- 5) Naoko Emura, Tetsuo Denda, Miyuki Sakai, Keisuke Ueda
Dimorphism of the seed-dispersing organ in a pantropical coastal plant, *Scaevola taccada*: heterogeneous population structures across islands, Issue4, p. 733-740

c. 科研費申請「国際発進力強化」について

d. 編集について

- ・新しい Aims and Scope と Instructions for Authors 及び和和文化
- ・Ecological Research 論文賞 細則の改訂について
- ・著者へのデータ公開要請について

e. 電子ジャーナル化について

f. Ecological Research シンポジウムとセミナーについて

g. 海外 ER 賞受賞者の大会招聘

h. Journal of Plant Research と Ecological Research の合同特集号出版について

(文責：久米篤)

4. 日本生態学会誌刊行協議会

日時：2015年3月18日 13:30～15:30 (B会場)

出席者：古賀庸憲(編集長)、伊藤明、大塚俊之、永光輝義、嶺田拓哉、川口勇生、中川弥智子、高田宜武、今藤夏子

a. 報告事項

①出版状況

i) 投稿、審査状況(2015年3月13日現在)

年	原著 受付	総説 受付	原著・総説			特集			学術 情報	連載
			受理	却下	審査中	受付	受理	審査中		
2015	2	2	0	2	2	3 (19編)	0	3 (19)	0	1
2014	6	4	3	2	5	5 (27編)	1 (5)	4 (22)	2	5
2013	6	3	3	5	1	5 (29編)	5 (29)	0	5	5

ii) 刊行状況

64巻(2014年)刊行状況

号	原著	総説	特集	学術 情報	連載	その他・ 記事	合計	頁数
1	0	0	2 (11編)	1	2	1	15	100
2	0	1	1 (5編)	1	1	0	8	66
3	0	2	1 (7編)	0	2	0	11	110
計	0	3	4 (23編)	2	5	1	34	276

②新連載提案

- 提案①「専門外のための生態学」
- 提案②「今後5年間の環境の動きを見据えたテーマ」
- 提案③「生物多様性情報と生態学」
- 提案④「環境に携わる省庁部署・企業の紹介」

③その他

- ・学会誌発行時の会員にメールで目次を知らせる。
- ・通常 J-stage を目指すかどうか検討する

(文責：古賀庸憲)

5. 保全生態学研究刊行協議会

日時：2015年3月18日 11:15-13:15 C会場

出席者：西廣淳、角野康郎、小池文人、早矢仕有子、奥山雄大、藤井伸二、倉本宣、細将貴、横溝裕行、山本智子

a. 報告事項

①19巻(2014)の発行状況

19巻1号 原著論文6編、調査報告3編、その他1編
19巻2号 原著論文5編、調査報告1編、保全情報1編、その他2編(特集「東日本大震災と砂浜海岸エコトーン植生：津波による攪乱とその後の回復」掲載記事を含む)

②投稿・編集状況

2014年投稿・編集状況

	原著	総説	調査 報告	実践 報告	解説	保全 情報	意見・ 他	合計
新規投稿	19	1	3	0	0	0	1	24
受理	8	1	2	0	0	0	1	12
却下・取下	10	0	1	0	0	0	0	11
審査中	1	0	0	0	0	0	0	1

	原著	総説	調査 報告	実践 報告	解説	保全 情報	意見・ 他	合計
植物	9	0	1	0	0	0	1	10
動物	7	0	2	0	0	0	0	7
植物・動物	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	3	1	0	0	0	0	0	4
投稿総数	19	1	3	0	0	0	1	22

2013年新規投稿数34編：受理19編、却下・取り下げ14編、審査中1編

2012年新規投稿数28編：受理21編、却下・取り下げ7編

2011年新規投稿数32編：受理25編、却下・取り下げ7編

b. 審議事項

「保全生態学研究」の魅力向上、投稿と活用を促進に向け、以下の議論を行った。

①投稿規定の見直し

以下の方針を盛り込んだ投稿規定の改訂を行うことが議論された。改訂にあたっては、日本生態学会誌編集委員会・学会執行部との調整をとった上で、理事会にはかるものとする。

- 1) 現状の「第一著者は日本生態学会の個人会員に限る」という投稿資格規定を、「著者の一人に日本生態学会の個人会員あるいは保全生態学研究購読者を含む」という内容に変更する。
- 2) 投稿の方法の説明を電子投稿システム(Editorial Manager)にあわせた説明に変更する。
- 3) ウェブサイトの引用の仕方を見直す。

②PDFダウンロード方針の見直し

現在、出版から2年が経過したバックナンバーはCiNiiから誰でも無料でダウンロード可能としている。CiNiiサービスの終了(http://www.nii.ac.jp/nels_soc/about/schedule/)に伴い、J-Stage liteに移行する方針で準備中だが(理事会承認済み)、J-Stage liteはPDFの即時公開を原則としている。

J-Stage liteへの移行を機に、雑誌出版後に即時PDF公開とする方針を提案することとした。これにより、雑誌の価値が向上し、投稿の促進と成果の活用が進むことが期待される。一方、雑誌の購読者が減少する可能性もある。即時PDF公開は、将来的なオンラインジャーナル化や投稿料規定なども視野に入れた試みとして、2年間で影響を検証しつつ進めることが議論された。

(文責：西廣淳)

6. 自然保護専門委員会

日時：2015年3月18日(水) 11:15～13:15

場所：鹿児島大学郡元キャンパス D会場

出席委員：現委員14名：露崎、紺野、川上、和田、金子、井上、逸見、増澤、竹門、加藤、清水、阿部、村上、井田

a. 審議および承認事項

①2014年度活動費支出(1～12月)報告および2015年度活動費予算

2014年度活動費101,252円(濃飛道路要望書提出及びアフターケア活動費)

2015年度予算100,000円(アフターケア活動費)

②要望書および意見書提出への取り組み

総会決議に諮る「京都府亀岡市のアユモドキ生息地での専用球技場建設計画の再考を求める要望書」の最終チェックを行った。若干の訂正後、総会への要望書提出について決議・承認された。

b. 報告事項

①要望書・意見書等の提出および関連活動(2014年3月～2015年3月)

- 1) 著しく高い生物多様性を擁する沖縄県大浦湾の環境保全を求める19学会合同要望書(2014/11/11提出)(加藤委員長)

藤委員長)

- 2) 京都府亀岡市のアユモドキ生息地周辺における専用球技場開発等に対する要請(2014/7/2提出)
- 3) 中津川市岩屋堂の自然を守るための濃飛横断道路計画再考の要望書(2014/6/24提出)(和田委員)
- 4) 緊急シンポジウム「里山の価値と存続を考える生態学～濃飛横断道は中津川市岩屋堂の里山にどのような影響を及ぼすのか?～」(2014/11/23開催)(和田委員)

②外来種検討作業部会報告(村上委員)

環境省・農林水産省の「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト(案)」および「外来種被害防止行動計画(案)」の最終検討会議が2月に開催され、3月末に公表されることとなった。リストの学会員への普及啓発のため今大会でフォーラムU01を開催する。部会では今後、全国の外来種防除事例の成功例を収集整理、順次公表し、これらをまとめてハンドブックにする。

③アフターケア委員会報告

- ・「石狩海岸の風車建設事業計画の中止を求める要望書」に関するフォロー活動(紺野委員)
- ・魚釣島問題アフターケア委員会報告(資料配付)
- ・上関アフターケア委員会報告(加藤委員長)
- ・中池見アフターケア委員会報告(加藤委員長)
→検討委員会が新幹線ルートを元のアクセスルートに戻すことを提言した。

④各担当委員からの報告

- ・海砂採取問題(継続・要望書検討中)
→今後、要望書の起草・提出を目指す。
- ・ネオニコチノイド系の農薬について(継続・要望書検討中)
→農業・農薬関係の専門委員を新たに設置し、その委員を中心に要望書の起草・提出を目指す。

⑤その他

- ・南アルプスユネスコエコパークとJRリニア新幹線について(増澤委員)
→残土問題について、問題は山積しているが、取り組み方法を模索中。

(文責：加藤真)

7. 外来種検討作業部会

開催日：2015年3月18日9:00～11:30

場所：鹿児島大学共通教育棟1号館131

出席者：村上・石田・池田・大河内・川上・常田・富山・増澤・富山

オブザーバー池田・可知(11名)

a. 審議事項

①メンバーについて

長年委員を務められた江口和洋さんが辞任、両生爬虫類として戸田光彦さんをお願いする。植物で西廣さんをお願いしたが、超多忙で無理とのことと他を探す。

②外来種リスト作成および外来種被害防止行動計画の経過報告と審議

愛知目標達成のための侵略的外来種リスト作成および

外来種被害防止行動計画策定の両会議は、24年度以来継続して論議されてきたが、今年の2月に最終会議があり、原案が作成された。現在、公表のための詰めが行われており、3月末に公表される予定である。これらの経過説明と論議を行った。

1) 愛知目標達成のための侵略的外来種リスト作成について

これについては、今大会でフォーラム U01 愛知目標達成のための侵略的外来種リスト（仮称）の現状と課題を3月19日に開催するので、詳しくはここに参加頂きたい。経過の内昨年度からの主な変更点は下記の通りである。

名称は、利用者サイドからは、侵略的外来種リストという名称は利用者が悪者になるので、別の名称にすべきという強い主張があり、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」という名前に決定された。略称に関しても同様の主張があり、「生態系等被害防止外来種リスト」になった。

種の掲載基準に関しては、前回からの変更点として、感染症・寄生物に関しては、原則として感染症等他法令で対応されているものは対象としないとなっていたが、生態系への被害が甚大なものは対象とすると改め、松枯れ病のマツノザイセンチュウが入った。

枠組みに関しては、対策が定着状況に応じて変わるので、未定着の種に対しては、定着予防外来種とし、定着種に関しては総合対策外来種の中に被害の甚大性を考慮した上で、緊急性や実行可能性を考慮した緊急対策外来種、それに準ずる重点対策外来種、その他総合対策外来種の3つのカテゴリー分けを行った。産業利用の外来種に関しては産業管理外来種という名称にし、産業又は公益的役割において重要であり、現段階で代替性が無い種に関しては、利用に当たり適切な管理を行うことと決めた。

2) 外来種被害防止行動計画策定について

外来種被害防止行動計画は第1部外来種対策を実施する上での基本方針、第2部外来種対策を推進するための行動計画に分けた。一部では第1章外来種対策に関する基本認識と目標、第2章を外来種被害防止行動計画の考え方と指針とした。これはさらに第1節社会において外来種対策を第主流化するための基本的な考え方（4つの観点、8つの基本的な考え方）第2部では第1章国による具体的な行動、第2章 実施状況の点検と見直しという構成となった。構成は分かりやすくなり、第2章で具体的な事例を入れたことで理解がしやすくなった。

全体として論議したことは、リストや行動計画が具体的に定められた後に何をすべきかということであった。今後これを分かりやすく普及啓発することが必要で概要版を作成すること。これらの内容を各地域で作成されつつある生物多様性地域戦略に反映することや特定外来生物への追加指定を行うことである。

普及啓発に関しては、外来生物ハンドブックを作成するまでに、まず外来種管理の成功事例を集めて特集として印刷すること。とくに国内外来種の事例や生物

多様性保全上重要な地域での取り組み例、例えば小笠原諸島や沖縄や奄美大島などの事例、その他当初での外来種対策など数多くの事例があるので、それらを集める作業を行う。とくに今回は行動計画には書けなかったが、どのような予算を獲得して対策を進めたのかなど（例えば緊急雇用対策で外来魚駆除を実施した例など）も対策を進める上で役立つので、事例を集める等事例集を収集整理して、これらを広く印刷して普及啓発を進めることとした。

3) 国内外来種の白山のコマクサの経過と現状説明

増沢委員から平成21年度からの取り組みについて概要の説明があった。大きな問題となったことは白山のコマクサが国内外来種では無いという強い主張があったこと。これに対しては自ら散布したと場所を含めて明らかにした人がでて、遺伝子解析の結果もそれを裏付けることとなり、国内外来種として位置づけができた。その後は駆除作業が進んでいるが、現在は、神社内のコマクサを生命の大切さをもとに駆除に反対し、そこが種子の散布源となり根絶計画が進んでいないこと等が問題となっている。これに関しては行動計画のコラムにも記述すると共に国内外来種の例としてリストにも入れたが、さらなる取り組みを継続する必要がある。

③ 外来生物ハンドブックについて

上でも触れたが「外来種被害防止行動計画」と「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」が作成され、1段落したことを受けて、ハンドブック作成に取り組む機運が生じてきた。これらの策定委員会には本部会の委員が多数参加して実質的な論議が行われて、今後これらをベースとした取り組みが可能となった。上述したようにまずは、外来種対策の成功事例を集めたものを作ることが課題である。このためにまずは部会委員を中心に事例を集めて、順次何らかの形で出版公表した後に、これらを編集して本の作成を行うこととした。

（文責：村上興正）

8. 将来計画専門委員会

日時：2015年3月18日（水）11:15-13:20

場所：鹿児島大学郡元キャンパス B会場

出席予定者（敬称略）：粕谷、奥田、酒井、巖佐、佐竹、北島、立木、森長、小泉、三木、辻、岡部専務理事（オブザーバー）、石井庶務担当理事（オブザーバー）、齊藤会長（オブザーバー）、

a. 報告事項

- 1) 前年度議事録の確認
- 2) 総合地球環境学研究所報告（奥田）
- 3) 京大学生態学センター報告（酒井）
- 4) 学会会議の動向報告（巖佐）
- 5) 昨年の提案からアジェンダ作成までの経緯
- 6) フォーラム「海外で研究職に就くには（2）」

b. 議題

- 1) 学会会議「生態学の展望」への意見
- 2) 学会のさらなる国際化に向け

- 3) 若手の会の活動バックアップ
- 4) 企業との連携推進
- 5) その他

c. 議論されたこと

- 1) 国際化対応 WG または部会（国内外人教員などを中心に部会横断的に）の設置の必要性
- 2) プロのライターや TV 制作者を用いたさらなるより効果的な生態学の啓蒙・普及の必要性
- 3) 大会における late registration 者の救済策

など

(文責：辻和希)

9. 生態教育専門委員会

日時：2015 年 3 月 18 日 (水) 13:30 ~ 15:30

場所：鹿大共通教育棟 1 号館 休憩室 1

出席：畑田、平山、亀田、西脇、嶋田、白川、丑丸 欠席：広瀬、宮田、中井、中田

a. 議題

- ①教育学部枠の新委員案について
三宅崇さん (岐阜大学・教育学部)
- ②博物館枠の委員 1 名増員希望 (人選は委員会一任でお願いしたい)
- ③副委員長設置希望。初代副委員長は畑田 彩さん。

b. 協議題・報告事項

- ①生態教育支援データベース：3/21 フォーラム U10 で公開予定。
著作権などに配慮した利用規程、投稿規定、査読体制を整備予定。
教材・素材の小・中・高・大学・一般向け別の分類、単元のタグについて。
昨年、学会の常任幹事会に CMS・HP の構築予算要求し認められたが、新委員である中田委員の活躍によって予算措置無しで CMS データベース・HP の構築がなされた。
- ②フォーラム U10 「ついに公開！生態教育支援データベース」3/21 16:30-L 会場
生態教育の実習教材、授業教材、写真素材などの投稿を募り、委員会のチェック後に「生態教育支援データベース」HP に公開し生態教育支援に活用する。
- ③高校生ポスター賞審査員 (3/21 9:00-13:00 第 2 体育館)
畑田、広瀬、平山、宮田、中井、西脇、丑丸
- ④みんなのジュニア生態学講座 (3/21 L 会場 13:45-15:15、世話人は嶋田さん)
新企画：若手 3 名が研究内容、研究のきっかけや中学～高校の様子を語る。
・塩尻かおり (京都大学・白眉センター)
・高橋佑磨 (東北大学・学際科学フロンティア研究所)
・山北剛久 ([独] 海洋研究開発機構 JAMSTEC)
- ⑤今年度活動：日本生物教育会 (8/6) で嶋田委員が「生態学実習書 web 版案」公表
生態学教育専門委員会合宿 (9/27-28) 京都外語大「データベース」他

(文責：西脇亜也)

10. 生態系管理専門委員会

日時：2015 年 3 月 18 日 9:00 ~ 11:00

場所：C 会場

出席者：古賀庸憲、逸見泰久、角野康郎、鎌田磨人、高村典子、山田俊弘、西廣淳、竹門康弘、津田智、日鷹一雅、平吹喜彦、松田裕之、橋本佳延、西田貴明、白川勝信、正木隆

a. 報告

- ①自然再生講習
2014 年 9 月 23 日に京都市で開催し、150 名の参加を得た。
- ②宝ヶ池シンポ (2015 年 3 月 22 日@京都市)
自然講習会のフォローアップとして、シンポの実施に協力することとした。
- ③麻機遊水地のフォローアップについて
自然再生協議会に西廣委員が参加することとなり、委員会としても引き続き支援していく。
- ④東日本大震災被災地の現状について
平吹委員より被災地の現状について詳細な報告が行われ、復興事業の一部では生態系に配慮した対応がなされるようになったが、依然として大規模な土地改変を伴う事業が進んでおり、さまざまな課題が山積しているとの情報が共有された。委員会としては、今後、現地の研究者の求めに対応し、現場で有効に機能する文書の作成・提出を迅速に行っていく方針とすることで合意した。
- ⑤応用生態工学会での企画集会「国土強靱化と自然環境保全」(2014 年 9 月 18 日) の開催
他学会等との連携を深めることを目的として開催した。そして、大規模災害が発生した時に、復旧・復興を行っていく上で生態系管理上留意すべき事項や計画に盛り込むべき事項を抽出するための調査を、被災後ただちに実施する必要があること、そのための体制を関連学会で連携して構築する必要があることが議論された。これを受けて、防災・減災等と環境保全の両立への生態系管理専門委員会としての対応を、本大会フォーラム (U07) で議論することとした。
- ⑥生態系管理専門委員会研究会 (2014 年 5 月 27 日) の開催
「グリーンインフラに関する課題への対応、緑の防潮堤への対応、福島県山林における生態系サービスの持続的利用に係る支援、生物多様性地域戦略の動向とそれへの対応」について検討を行い、委員会としてこれら事項について対応していく必要があるとの認識を共有した。
- ⑦フォーラム (2015 年 3 月 21 日) の開催について
大会の公開の場の中で、生態系管理専門委員会の今後の方向性について議論することが報告された。

b. 2015 年度の活動方針

- ①ミッションの再定義
対応すべき課題が多様化した現状を踏まえ、フォーラム等をとおして委員会のミッションを検討し、再定義するとの方針が合意された。
- ②グリーンインフラに関する動向と委員会としての対応

今後重要な政策となるグリーンインフラストラクチャーに関して、委員会内外の主体と連携を図る。グリーンインフラ研究会に生態系管理専門委員会として参加することとし、西廣委員を派遣することが了承された。

③自然再生講習会の開催について

自然再生講習会のあり方について再検討し、新しい内容（参加型・演習型など）の講習会を提案・実施する方針であることが紹介され、了解された。

④自然再生 HB の改訂について

現段階での改訂は実施しない。まずは、既刊の自然再生 HB の販売促進が必要であるとの認識が確認され、各委員が関わる講演会や講習会の中で宣伝・販売に協力していくことが合意された。

（文責：鎌田磨人）

11. 大規模長期生態学専門委員会

出席者：日浦勉、大手信人、三枝信子、鈴木智之、中村誠宏、黒川紘子、仲間雅裕、正木隆、伊東明、中野伸一・石原正恵（オブザーバ）

a. 話題

- ・大面積森林プロットネットワーク（CTFS 日本版）
日台 WS を機に議論開始 日本で可能か？ 19 日に集会
- ・世界の温帯林のメタ解析ネットワーク
7 月国際植生学会チェコ
- ・GLP
4 月 28-30 日台北で科学委員会開催予定
- ・JaLTER
2014 年 9 月に京大芦生研究林で ASM 開催
2015 年 9 月 14-16 日に国立環境研・霞ヶ浦で
JaLTERDB をトムソンロイターからデータサイサイト
ーションに登録の打診。まず ERDP から登録すること
に。
- ・FluxNet
炭素収支関連大型研究計画申請 → 推進費で部分的
に具体化（ポイントスケールから地域スケールへ）
- ・アマ藻観測ネットワーク、コンブ観測ネットワーク、
岩礁潮間帯観測ネットワーク
藻場の北方域への拡大で炭素シンクはどうか？
etc
- ・ベルモントフォーラム FS（2 年間）採択
FS 期間中にネットワーク形成を行う。21 日キック
オフシンポ開催
- ・マスタープラン対応 環境関連は Future Earth を全
面に出した学会や組織（生態学会、CGER、水文水資
源学会など）が複数有り、今後調整・協力が必要か。
（文責：日浦勉）

12. 野外安全管理委員会

出席者：鈴木、飯島、大館、北村

a. 生態学会鹿児島大会での企画について

- ・ランチョンフォーラムの開催
3 月 19 日 12:15 ~ 13:15 U02 野外調査に初めて行

く人のための安全講習を実施する。そのための準備を進めた。

- ・一般会員向けポスターフォーラムの開催
3 月 19 日・21 日に PA・PB 会場において、ポスター
フォーラム「野外調査に初めて行く人のための安全講
習」を実施する。
- ・高校教員・高校生向けポスターフォーラムの開催
3 月 21 日に PC 会場において、高校教員・高校生を対
象としたポスターフォーラム「野外調査に初めて行く
人のための安全講習」を実施する。

b. 2014 年度の活動報告

- ・上記、鹿児島大会でのフォーラム、ポスターフォー
ラムの開催を準備した。
- ・野外調査安全管理マニュアル出版準備を進めている
が、版下作成が極めて困難であり、進行が遅れている。
- ・全国委員に事故情報の報告を依頼したが、とくに報告
はなかった。

c. 2015 年度の活動予定

- ・野外調査安全管理マニュアル出版準備
当初、版下入稿を条件に出版予算の確保を認めていた
だったが、版下作成を含めた出版計画への変更をお認
めいただきたい。
- ・2016 年、仙台大会でのフォーラム、ポスターフォー
ラム開催に向けた準備を進める。
- ・ヒヤリハット情報収集のための協力依頼
事故には至らなかったが、ひやりとした、ハッとした、
ヒヤリハット事例を収集する。地区会を通じて、情報
提供を依頼する予定なので、ご協力をいただきたい。
（文責：鈴木準一郎）

13. キャリア支援専門委員会

a. 報告事項

これまでの定常的な委員会活動に加えて新たに以下の活
動をおこなうこととなった。

①キャリアパス多様化推進事業

東北大環境機関コンソーシアムおよび PEM
(Professional Ecosystem Manager) カリキュラムと連携。
→若手会員に対して、社会で求められるスキルや考え
方を学ぶ機会を提供するため

b. 2015 年度計画

- ①年大会時の
キャリア支援フォーラムの開催
男女共同参画ランチョンフォーラムの開催
キャリア支援ブースの開設
- ②男女共同参画学協会主催「女子中高生夏の学校」での
野外実習担当
- ③男女共同参画学協会連絡会運営委員会およびシンポジ
ウムへの参加
- ④東北大学 PEM との連携
- ⑤企業と学生とのマッチングの強化
- ⑥年大会における小中学生の保育プログラム導入の検討

c. 提案事項

- ・生態学会で若手育成・キャリア支援をおこなっている
他の委員会との連携（効率的な分担）が必要。

- ・ 託児所・ファミリー休憩室の運営に関して大会実行委員会とキャリア支援専門委員会で連携。

(文責：別宮有紀子)

14. 電子情報委員会

a. 昨年度の活動の報告

- ① 学会サーバのメンテナンス作業
通常通りの作業に加え、委員会からの要望に対応してデータベースシステム (MySQL) の更新作業、およびそれに付随する作業。
- ② 学会事務局の会員管理システムの更新関連
現行システムの更新作業への協力
- ③ データペーパー関連
国立環境研究所との連携の協定が4月1日付で発効する予定。今後とも国立環境研究所のサーバにデータを載せる。

b. 今年度の活動予定

- ① 学会サーバのメンテナンス作業
従来通り
- ② 次期会長・代議員選挙の電子投票
前回同様、自前の手作りシステムで対応
- ③ 電子情報関連業務を含む学会運営体制の見直し作業への対応
・ 現在、学会がレンタルしている専用サーバ上で動いているサービスと、その利用内容を整理する。
・ サーバ管理などを外部委託するにしろ、当面、委員会は維持。(電子業務担当理事をおき、委員会はなくすというのも選択肢だが)

(文責：竹中明夫)

15. 運営改革作業委員会

a. 運営改革作業部会について：ミッション・位置づけ

- ・ 作業部会は、執行部（会長）によって委嘱された短期的な組織である。
- ・ 「電子情報管理・運営体制検討タスクフォース」の提言を受け、会員管理、全国大会運営等に関連した電子情報システムの管理・運営体制を移行に関するロードマップを作成する。
- ・ 必要な機能、会員のボランティア負担の適正化、コストなどを考慮し、効率的で持続可能な体制の構築を行う。

b. 現時点での検討事項

- ① 作業部会での検討内容
 - 1) 大会運営システム（現状：通称「竹中システム」）
現行の大会運営システムは、個人のボランティア活動に依存しており、今後このまま利用していくことは不可能である。そこで、現状のシステムを廃止し、業者が提供する汎用システムをカスタマイズしたものを採用する。汎用システムに合わない部分については大会運営方法の簡略化も同時に検討する。
 - 2) 会員管理（現状：生態学会事務局の業務の一部）
大会運営とのスムーズな連携をはかるため、現在事務局が手作業で実施している会員管理業務をシステム・現業の両方で業者に委託する。浮いた事務局の

ロードを大会運営サポート業務等に振り分ける。

- 3) 大会運営体制（現状：大会企画委員会+大会実行委員会による運営）

大会実行委員会・大会企画委員会がボランティアで実施している作業の一部を業務委託する、事務局の負担を増すなどして、会員の負担軽減をはかる。→ これに関しては、別途「大会のあり方検討部会」を設置して、さらなる検討を行うこととなった（2015年2月18日）。

- ② 作業部会の検討事項、および作業部会からの提案事項
 - 1) システム委託にかかる新規費用についての見直し
・ システムの委託による費用増分の必要性については、竹中システムを中心とするボランティアの適正化と考えるべきである。
・ 現状と、各社に外注した場合の費用比較について
1. 大会運営システム担当：竹中、2. 会員管理担当：富田
 - 2) 会員管理業務に関する制限（地区会費・その他のオプション）について

新システムでは、地区ごとに細かく会費を徴収するやり方、冊子体不要による減免措置などの細かい料金設定がネックになる。将来的に地区会費のあり方を見直す必要はあるが、すぐに変更はできないので、新システムは地区会費に対応するものとするしかない。しかし、2社のうち1社は対応できないという返答が来たため、委託先候補は1社と判断される。

- 3) その他
・ 決済システム（クレジット等）の導入に関しては会員サービスに直結するため、大会までに一定の方針を出すことが必要。

参考：初期投資額 110万円程度、手数料は5%台になる見込み。

- ・ 札幌大会でのEAFES同時開催は、少なくともシステム上は不可能。

- 4) 今後のスケジュール（現状での想定）

- ・ 2015/4 詳細な仕様を業者とさらに相談
大会運営システム担当：竹中
会員管理担当：富田（竹中、富田、鈴木、橋口）
- ・ 2015/7 理事会にて業務委託を承認してもらう
- ・ 2015/11 会員管理業務を委託
橋口さんを企画委員会・運営部会へ。仙台大会の準備作業を通じて、事務局業務の範囲を検討する。

- ・ 2016/3 仙台大会
- ・ 2016/5 大会関連業務を含む全業務を委託
- ・ 2017/3 東京大会（ここで新システムへ完全移行）
- ・ 2018/3 札幌大会（この時まで、持続可能な運営体制に移行する）

＜2015年度～2018年度にかけて継続的に「収入を増やす and/or 支出を減らす方針を検討する＞

(文責：陀安一郎)

16. 日本学術会議の活動報告

○昨年10月1日に、日本学術会議の会員・連携会員が交代した。長年会員をつとめられた鷺谷いづみさんが任期中で会員を降りられ、巖佐庸が会員になった（6年間の任期）。

日本生態学会にもっとも関連が深い生態科学分科会は、第2部（生命科学）の中の分野別委員会である統合生物学委員会に所属する分科会である。巖佐が、統合生物学委員長になった。

○生態科学分科会のメンバーは：巖佐、帰山、粕谷、加藤、河田、塩尻、嶋田、辻、中静、中野、難波、半場、福井、松本、吉田、鷺谷（50音順）

○第1回の生態科学分科会を、平成27年1月9日（金）に日本学術会議にて開催した。以下がその内容：

- (1) 日本学術会議の組織についての説明（巖佐）
- (2) 分科会役員を選出：委員長が巖佐、副委員長が吉田、幹事が福井と半場。
- (3) 分科会の3年間の活動方針

巖佐委員長より、「生態科学の展望（仮題）」に関する報告を出すことが提案され、了承された。またこの報告作成にあたって、2016年3月に仙台で開催予定の日本生態学会にて、生態科学分科会主催による「生態科学の展望」に関するシンポジウムの開催を計画することになった。

報告・提案についての意見：報告は、各委員が1000～2000字で執筆したものを委員長の巖佐がまとめる形でたたき台を作成し、さらに委員で審議をして最終版を作成することになった。最初の文書の締め切りは2月20日。また内容としては、今後の伸ばすべき研究分野、教育、大型研究、キャリアパス、国際プロジェクト、フィールド施設の現況等が挙げられ、今後調整を行うことになった。取りまとめるまでには、日本生態学会や他の関連学会のメンバーの意見も反映させる機会を設けるが、最終的には生態科学分科会の責任で執筆するものとする。

- (4) 生態科学分科会のメーリングリストを作成し（吉田）、今後はメーリングリスト上で意見交換を行うこととなった。

（文責：巖佐庸）

B. 承認事項

1. 第64回大会（2017年）開催地

第64回大会は関東地区が担当し、2017年3月に東京にて行うことが承認された。

2. 第65回大会（2018年）担当地区会

第65回大会は北海道地区会が担当することが承認された。

C. 審議事項

1. 2014 年度決算案について

2014 年度決算案が決議された。

<一般会計>

収 入 の 部			支 出 の 部		
	14 予算	14 決算		14 予算	14 決算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	29,200,000	29,743,525	ER	12,000,000	11,339,878
正会員（学生）	7,000,000	6,760,075	生態誌	4,500,000	2,902,893
賛助会員	2,100,000	2,296,000	保全誌	2,200,000	1,362,120
地区会費	1,000,000	369,000	ニュースレター	1,000,000	934,159
小 計	39,300,000	39,168,600	和文誌編集費	1,000,000	899,189
ER 売上還元金	1,391,745	1,550,000	小 計	20,700,000	17,438,239
編集事務費用	1,750,905	1,950,000	会議費	200,000	169,442
学会誌売上げ	1,300,000	1,237,200	旅費・交通費	2,500,000	1,560,899
科研費			人件費	10,000,000	10,449,086
国際情報発信強化 A	17,600,000	17,600,000	地区会活動費	2,500,000	960,136
公開講演会	1,300,000	0	大会支出	21,000,000	21,730,012
小 計	18,900,000	17,600,000	公開講演会	1,300,000	1,300,137
出版印税	700,000	1,150,255	INTECOL 会費	430,000	469,409
広告代	180,000	180,000	事務費		
著作権使用料	400,000	367,011	通信費	800,000	955,429
ER 超過ページ代	700,000	2,052,100	消耗品費	250,000	358,350
大会収入	19,000,000	22,524,600	雑費	1,400,000	1,323,511
講習会費	100,000	260,000	銀行手数料	120,000	154,416
その他	15,000	6,803	レンタルサーバ料	0	0
地区会からの寄付金		11,431,777	事務所維持費	1,680,000	1,540,000
前年度繰越金	53,748,925	53,748,925	税務費用	500,000	388,238
			小 計	4,750,000	4,719,944
			各種委員会費	1,500,000	770,872
			選挙費	0	0
			EAFES 費用	200,000	246,850
			講習会費	600,000	725,868
			国際化推進費		
			編集委託費	6,000,000	6,481,632
			英文校閲・翻訳	2,000,000	2,432,976
			編集委員会開催等	600,000	464,916
			電子化関連費	2,000,000	469,756
			シンポ・セミナー開催関連	1,500,000	3,668,792
			人件費	3,000,000	2,692,428
			論文 OA・FA に係る経費	2,500,000	4,099,312
			広報費		810,756
			消耗品費		31,948
			小 計	17,600,000	21,152,516
			法人税	400,000	293,900
			次年度繰越金	53,806,575	71,239,961
合 計	137,486,575	153,227,271	合 計	137,486,575	153,227,271
単年度収入	83,737,650	99,478,346	単年度支出	83,680,000	81,987,310

<特別会計>

宮地基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	14 予算	14 決算		14 予算	14 決算
前年度繰越金	2,200,144	2,200,144	宮地賞賞金	400,000	400,000
預金利息	0	334	雑費	2,000	3,339
			次年度繰越金	1,798,144	1,797,139
合 計	2,200,144	2,200,478	合 計	2,200,144	2,200,478

大島基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	14 予算	14 決算		14 予算	14 決算
前年度繰越金	8,934,287	8,934,287	大島賞賞金	200,000	200,000
預金利息	0	1,437	雑費	1,500	2,259
			次年度繰越金	8,732,787	8,733,465
合 計	8,934,287	8,935,724	合 計	8,934,287	8,935,724

琵琶湖賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	14 予算	14 決算		14 予算	14 決算
前年度繰越金	240,951	240,951	旅費	0	0
預金利息	0	39	その他諸費用	500	855
			次年度繰越金	240,451	240,135
合 計	240,951	240,990	合 計	240,951	240,990

鈴木賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	14 予算	14 決算		14 予算	14 決算
前年度繰越金	4,849,321	4,849,321	鈴木賞賞金	150,000	150,000
預金利息	0	779	雑費	1,500	2,799
			次年度繰越金	4,697,821	4,697,301
合 計	4,849,321	4,850,100	合 計	4,849,321	4,850,100

2. 2015 年度予算案について

2015 年度予算案が決議された。

<一般会計>

収 入 の 部			支 出 の 部		
	14 決算	15 予算		14 決算	15 予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	29,743,525	29,500,000	ER	11,339,878	18,000,000
正会員（学生）	6,760,075	6,500,000	生態誌	2,902,893	4,000,000
賛助会員	2,296,000	2,200,000	保全誌	1,362,120	2,000,000
地区会費	369,000	800,000	ニュースレター	934,159	1,000,000
小 計	39,168,600	39,000,000	ER 英文校閲・翻訳		2,500,000
ER 売上還元金	1,550,000	1,650,000	ER 誌 Open Access 経費		4,000,000
編集事務費用	1,950,000	2,000,000	和文誌編集費	899,189	350,000
学会誌売上げ	1,237,200	1,200,000	小 計	17,438,239	31,850,000
科研費			会議費	169,442	200,000
国際情報発信強化 A	17,600,000	17,600,000	旅費・交通費	1,560,899	2,500,000
公開講演会	0	1,300,000	人件費	10,449,086	13,500,000
小 計	17,600,000	18,900,000	地区会活動費	960,136	2,500,000
出版印税	1,150,255	1,000,000	大会支出	21,730,012	18,500,000
広告代	180,000	180,000	公開講演会	1,300,137	1,000,000
著作権使用料	367,011	350,000	INTECOL 会費	469,409	450,000
ER 超過ページ代	2,052,100	100,000	事務費		
大会収入	22,524,600	18,500,000	通信費	955,429	800,000
講習会費	260,000	100,000	消耗品費	358,350	300,000
その他	6,803	10,000	雑費	1,323,511	300,000
地区会からの寄付金	11,431,777		銀行手数料	154,416	150,000
前年度繰越金	53,748,925	71,533,861	レンタルサーバ料	0	470,000
			事務所維持費	1,540,000	1,680,000
			税務費用	388,238	300,000
			小 計	4,719,944	4,000,000
			各種委員会費	770,872	1,500,000
			選挙費	0	600,000
			EAFES 費用	246,850	200,000
			講習会費	725,868	350,000
			国際化推進費		
			編集委託費	6,481,632	
			英文校閲・翻訳	2,432,976	
			編集委員会開催等	464,916	
			電子化関連費	469,756	
			シンポ・セミナー開催関連	3,668,792	
			人件費	2,692,428	
			論文 OA・FA に係る経費	4,099,312	
			広報費	810,756	
			消耗品費	31,948	
			小 計	21,152,516	
			法人税	293,900	500,000
			次年度繰越金	71,239,961	76,873,861
合 計	153,227,271	154,523,861	合 計	153,227,271	154,523,861
単年度収入	99,478,346	82,990,000	単年度支出	81,987,310	77,650,000

<特別会計>

宮地基金

収入の部			支出の部		
	14 決算	15 予算		14 決算	15 予算
前年度繰越金	2,200,144	1,797,139	宮地賞賞金	400,000	300,000
預金利息	334	0	雑費	3,339	2,000
			次年度繰越金	1,797,139	1,495,139
合計	2,200,478	1,797,139	合計	2,200,478	1,797,139

大島基金

収入の部			支出の部		
	14 決算	15 予算		14 決算	15 予算
前年度繰越金	8,934,287	8,733,465	大島賞賞金	200,000	200,000
預金利息	1,437	0	雑費	2,259	1,500
			次年度繰越金	8,733,465	8,531,965
合計	8,935,724	8,733,465	合計	8,935,724	8,733,465

琵琶湖賞基金

収入の部			支出の部		
	14 決算	15 予算		14 決算	15 予算
前年度繰越金	240,951	240,135	旅費	0	200,000
預金利息	39	0	その他諸費用	855	40,135
			次年度繰越金	240,135	0
合計	240,990	240,135	合計	240,990	240,135

鈴木賞基金

収入の部			支出の部		
	14 決算	15 予算		14 決算	15 予算
前年度繰越金	4,849,321	4,697,301	鈴木賞賞金	150,000	200,000
預金利息	779	0	雑費	2,799	2,500
			次年度繰越金	4,697,301	4,494,801
合計	4,850,100	4,697,301	合計	4,850,100	4,697,301

3. 活動方針（アジェンダ）について

以下の活動方針（アジェンダ）が決議された。

【日本生態学会アジェンダ】

日本生態学会は、生態学とその関連分野を研究する者のコミュニティで、研究成果の発信、会員の交流を通じて生態学を深化・発展させること、またその成果を社会に還元することを目的として活動を行ってきた。ここで、近年の社会情勢の変化に対応するために強化する活動の指針として、以下のアジェンダを採択する。

次世代の育成：生態学的研究に携わる学生や若手研究者の育成、研究環境の改善、キャリア形成支援に積極的に取り組む。

国際化：学術大会および Ecological Research を通して一層の国際化を推進する。国際機関との交流も促進する。とくに、アジアの生態学研究者どうしが交流する場としての機能を高める。

社会貢献：生態学の知識の普及に積極的に取り組むとともに、現代社会が抱える諸問題に対し生態学的見地からの提言を主体的に行う。生態学研究者と諸問題の解決に取り組む実務者との協働を促す。

他分野との横断的交流：他分野・領域との交流を積極的に行うことで、生態学をさらに深化させ、知の総合において生態学が果たすべき役割の重要性への理解を促す。

4. 要望書

自然保護専門委員会からの要望書を決議した。

京都府亀岡市アユモドキ生息地での専用球技場建設計画の再考を求める要望書

要望書提出先：京都府知事、亀岡市長

2012年12月、京都府が亀岡市保津町の桂川（保津川）沿いの水田地域に専用球技場の建設計画を公表して以降、本学会の近畿地区会に所属する自然保護専門委員会が2013年3月と12月に、本学会の自然保護専門委員会は2014年7月に、計画を一旦停止して綿密な環境影響評価を実施し、それに基づいてこの事業の科学的かつ合

理的な見直しを求める要望書等を提出した。しかし、現在に至っても、この事業の実施主体である京都府と亀岡市は、この一連の要望に答える形での計画の見直しを全く行っていない。よって、日本生態学会は生態学の専門家を中心とする会員（2014年12月現在、3923人）の総意として、この事業計画を白紙に戻し、代替案も含めて綿密な環境影響評価を実施した上で、その是非を検討するよう、強く要望する。

京都府中部を流れる桂川は、保津峡の狭窄地帯の上部にある亀岡盆地で大きな氾濫原を形成し、長い年月をかけて豊かな氾濫原湿地生態系を作り上げてきた。この湿地生態系の多くは現在水田として利用され、当該地で農業を営む方々のご理解とご努力のおかげもあって、日本列島ではすでに稀となった低湿地特有の植物、昆虫、魚類等の持続的な生育と生息が可能となっている。その中には、国の天然記念物に指定され、環境省レッドリストで絶滅危惧 IA 類に位置づけられている淡水魚アユモドキをはじめ、国または京都府のレッドデータブックに掲載された種が多数含まれている。この点で、亀岡市保津町とその周辺地域の氾濫原湿地生態系は、京都府が全国に誇るべき自然だといえる。

かつて、近畿地方から中国地方にかけて広く生息していたとされるアユモドキは、氾濫原湿地生態系の激減によって、現在、岡山県の2カ所と亀岡盆地の当該地域周辺のみに残っており、近畿地方では当該地域の水田地帯が最後の繁殖・生息地となっている。そのため、本種は、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」による保全対象種「国内希少野生動植物種」に指定されており、絶滅危惧種の中でも特別に高い優先度で保全すべき種とされている。京都府も、「京都府絶滅のおそれのある野生生物の保全に関する条例」に基づいてアユモドキを「指定希少野生生物」に指定し、2008年には「アユモドキ保全回復事業計画」も策定されている。当該地域は「京都の自然200選」にも選出されており、そこで繰り広げられてきた亀岡市と当該地域で農業に従事されている方々による各種の保全活動は、行政と住民の方々との協働活動の模範として、高く評価されるものであった。

ところが、2012年12月に京都府が公表し、2014年5月に亀岡市が「京都・亀岡保津川公園」として都市計画決定を行った、専用球技場を含む13.9haもの都市計画公園は、まさにこの近畿地方唯一のアユモドキの繁殖・初期成育場所に建設されるものであり、この計画が実施されれば、アユモドキとその他の希少湿地性生物の存続にとって不可欠な河川・農業用水路・水田からなる水系ネットワークの大部分が著しく損なわれると予想される。

京都府と亀岡市は、都市計画公園内に3.6haの「共生ゾーン」を設置し、府と市が設置した環境保全専門家会議や事業評価第三者委員会からの助言や意見を得つつ、アユモドキ等野生生物との共生を図るとしている。しかし、当地のアユモドキを含む貴重な生態系は、当該地域

での営農活動と、水田水域のプランクトン等微生物の高い生産性、水系ネットワーク、豊富で清純な地下水・湧水の存在など、さまざまな環境条件が組み合わさって形づくられ、残されてきたものと推察される。全国での研究・保全事例や当該地の現状を考えれば、そのような生息環境や生態系を、詳細な環境影響評価なしに、大幅に面積を縮小して計画・整備される代償区域によって永続的に保全することができることは、とうてい考えることができない。

しかるに、亀岡市は「京都・亀岡保津川公園」の都市計画決定後間もない2014年8月から既に用地取得に着手しており、京都府は2014年度中には計画の基本設計、2015年度中に実施設計を終えて、2016年度中に工事着手、2017年度中の完成を目指している。このスケジュールは、当初案よりも遅くなっているが、事業を一旦停止して詳細な環境影響評価を実施し、その結果を踏まえて計画を見直そうという姿勢は全く見られない。

京都府では、既に1960年代にミナミトミヨが絶滅しており、旧八木町では1980年代後半に一定の配慮を行いながらも圃場整備事業によってアユモドキを絶滅させた前例がある。詳細な影響評価や有効な保全対策が検討されていない中で進められている本計画も、アユモドキ等希少生物を絶滅に追い込む可能性が高く、日本の生物多様性国家戦略や生物多様性基本法にも抵触するものである。このような状況を踏まえて、日本生態学会は、以下の2点を要望する。

1. 当該開発計画を白紙に戻し、専用球技場の建設位置等の代替案を含めて、綿密な環境影響評価を行い、公表すること。
2. 上記の評価の結果を踏まえて、文化庁、環境省等関係する国の機関と京都府、亀岡市の行政、地域関係者、市民、専門家が十分に議論する場と期間を設け、当該地域のかげがえのない氾濫原湿地生態系や絶滅危惧種等と、人々の営農その他の営みとの持続可能な共生のあり方を、本計画の是非も含めて検討すること。

以上決議する
2015年3月20日
一般社団法人日本生態学会総会

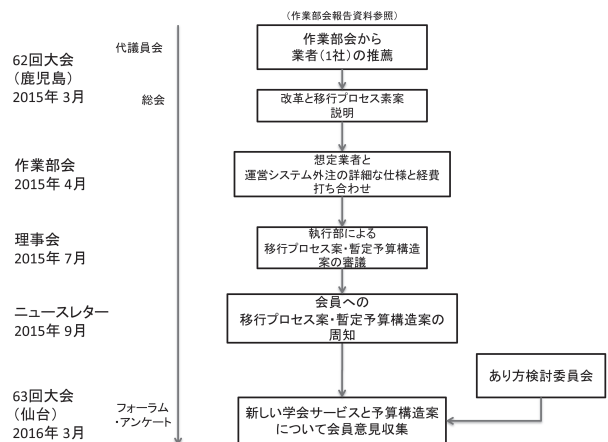
5. 生態学会運営改革について

*以下の改革案が決議された。
執行部が想定する今後の意思決定プロセスは以下の通り。

- 1) [鹿児島大会・代議員会] 作業部会から運営システム委託業者の推薦
- 2) [鹿児島大会・総会] 改革と移行プロセス概略の説明
- 3) 作業部会が想定業者と仕様と経費について打ち合わせ
- 4) [理事会] 執行部による改革と移行プロセス素案の説明

↓
移行プロセス案と暫定予算構造案の審議承認

- 5) [メールニュース] 会員への移行プロセス案と暫定予算構造案の周知
 6) [仙台大会・フォーラム] 新しい学会サービスと予算構造案について会員意見収集アンケート



II. 第62回日本生態学会大会の記録

第62回日本生態学会大会は鹿児島大学郡元キャンパスおよび鹿児島市民文化ホールを会場として2014年3月18日～3月22日に開催されました。

大会期間中に公開講演会1、シンポジウム12、フォーラム11、企画集会19、一般講演(口頭発表)166、一般講演(ポスター発表)866、高校生ポスター29、自由集会29、が行われました。参加者は2094名でした。5日間の日程とポスター賞(日本生態学会公認表彰)・高校生ポスター賞・英語口頭発表賞受賞者は以下の通りです。

日程

- 3月18日 代議員会、各種委員会(大会企画委員会、日本生態学会誌刊行協議会、Ecological Research 刊行協議会、保全生態学刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会、野外安全管理委員会、キャリア支援専門委員会、電子情報委員会、運営改革作業部会)、自由集会
- 3月19日 シンポジウム、一般講演(口頭発表・ポスター発表)、フォーラム、ランチョンフォーラム、自由集会
- 3月20日 総会、各賞授賞式、受賞講演、企画集会、フォーラム、懇親会
- 3月21日 一般講演(口頭発表・ポスター発表)、高校生ポスター発表、シンポジウム、フォーラム、ランチョンフォーラム、企画集会、自由集会、
- 3月22日 公開講演会、フォーラム、企画集会

ポスター受賞者

<植物生理生態>

【最優秀賞】

「低光・低栄養環境への適応による形質の収斂：ボルネオ熱帯樹木稚樹13種の例」*青柳亮太(京大・農)、北山兼弘(京大・農)

「ハワイフトモモにおける葉トライコームの適応的意義－光合成・水利用に注目して－」*甘田岳、小野田雄介(京大・農・森林生態)、市栄智明(高知大・農)、北山兼弘(京大・農・森林生態)

【優秀賞】

「Leaf internal anatomy of Japanese fern species and its effect on photosynthesis traits」*西田圭佑、半場祐子(KIT)

「鉾山跡地に自生するススキ(*Miscanthus sinensis* Andersson.)のAI耐性に関する内生菌と解毒物質の探索」*春間俊克、山路恵子(筑波大学大学院・生命環境)、升屋勇人(森林総研東北)

<動物と植物の相互関係>

【最優秀賞】

「絶対送粉共生系における植物側の防御形質の進化」

*古川沙央里、川北篤(京大・生態研)

【優秀賞】

「ボルネオ島低地フタバガキ混交林における一斉結実現象の究極要因である捕食者飽和仮説の実証的検証」*浅野郁、市岡孝朗(京大・人環)

「同所的に生息する3種の野ネズミにおけるドングリ中のタンニンに対する耐性能力の比較」*小野寺緑也、秋元佑香(北大・環境科学院)、島田卓哉(森林総研)、齊藤隆(北大FSC)

「ヤナギリハムシ幼虫の食害が節足動物群集に与える影響」*平野滋章(京大・生態研)、大串隆之(京大・生態研)

<進化>

【最優秀賞】

「適応トレードオフの違いが生態と進化のフィードバックに与える影響：ミクロゾムによる実証と理論」*笠田実(東大院・総合文化)、山道真人(京大・白眉/生態研)、吉田丈人(東大院・総合文化)

【優秀賞】

「独立したオス系統を内包するハダカアリ種群 *Cardiocondyla kagutsuchi* complex」*沖田一郎(岐阜大院・連農)、土田浩治(岐阜大・応生)

<物質循環>

【最優秀賞】

「日本列島における森林生態系の土壌窒素・リンの形態と濃度」*源六孝典、小野田雄介(京大・森林生態)、丹羽慈(自然研究)、北山兼弘(京大・森林生態)

【優秀賞】

「屋久島の森林の土壌窒素無機化速度：土壌-植生相互作用の指標として」*向井真那(京大・農・森林生態)、相場慎一郎(鹿大・理工)、北山兼弘(京大・農・森林生態)

「成熟林では林冠構造によって土壌呼吸の日変化の制御要因が異なる－カヤノ平ブナ林における研究－」*西

村貴皓（筑波大・生命環境）、飯村康夫（滋賀県立大・環境科学）、井田秀行（信州大・教育）、廣田充（筑波大・生命環境系）

<群落・遷移・更新>

【最優秀賞】

「佐渡島の林間放牧縮小が半自然草原の植生遷移に与えた影響」* 宮島伸子（新潟大・院自然科学）、川西基博（鹿児島大・教育）、崎尾均（新潟大・農）

「表土が失われる土壌攪乱はウダイカンバの初期定着を妨げるか？」* 山崎遥（北大院・環境科学）、吉田俊也（北大・北方生物圏 FSC）

<動物群集>

【優秀賞】

「長期的な間接効果の働き方」* 和田葉子（奈良女子大学院）、岩崎敬二（奈良大学）、遊佐陽一（奈良女子大学）

「森林における昆虫群集の空間構造：樹木の遺伝変異は重要か？」* 鍵谷進乃介（北大・環境科学院）、内海俊介（北大・FSC）

「変質する資源を利用する消費者の種間関係：競争か片利共存か？」* 川田尚平（東邦大・理）、瀧本岳（東邦大・理）

<菌類・微生物>

【優秀賞】

「風衝地におけるハイマツ群落の発達と外生菌根菌群集」* 小泉敬彦、奈良一秀（東大・院・新領域）

「本邦ブナ林における外生菌根菌の群集組成の地理的パターン」* 杉山賢子（京大理学部）、松岡俊将（京大生態研）、大園享司（京大生態研）

<植物個体群・植物繁殖>

【最優秀賞】

「異なる標高に分布するアキノキリンソウ（広義）の表現型の違いは環境によるか？：共通圃場実験」* 平野雅晃（信州大院・理工）、高橋耕一（信州大・理）

「ナガバジャノヒゲの多胚種子による繁殖戦略：種子の大きさと種子あたりの胚数が、実生サイズに与える影響」* 岡千尋、板垣智之、酒井聡樹（東北大・院・生命）

【優秀賞】

「同所的に存在するツククサとケツクサにおける繁殖干渉の可能性」* 勝原光希、丑丸敦史（神戸大学）

「遺伝子に刻まれたピロウの歴史—九州・四国に点在するピロウ集団はいかにして成立したのか—」* 梶田梨絵（広島大・総科）、近藤俊明（広島大・国際研）、大谷雅人（森林総研林育セ）、中村剛（台湾中央研究院・生物多様性研究中心）、横田晶嗣（琉球大・理）、奥田敏統、山田俊弘（広島大・総科）

「植物が花成タイミングを決定する分子メカニズム」* 西尾治幾、永野惇、岩山幸治、工藤洋（京大・生態研）、Diana Buzas（横浜市大・木原研）

<保全>

【最優秀賞】

「環境 DNA を用いたクラゲ類の分布調査～舞鶴湾のアカクラゲを例に～」* 福田向芳（神戸大学発達）、益田玲爾（京都大学フィールド研舞鶴）、藤原綾香（神戸大学発達）、山本哲史、源利文（神戸大院人間環境）

「アフリカ大型類人猿ボノボの生息地利用：長期行動観察と保全のリンクに向けて」* 寺田佐恵子、坂巻哲也、古市剛史、湯本貴和（京大・理）

【優秀賞】

「個体群再生計画下でのシマフクロウの分散：動的分布モデルを用いた予測」* 吉井千晶（北大院・農）、山浦悠一（森林総研・植生）、小林慶子（北大院・農）、赤坂卓美（帯広畜大）、中村太士（北大院・農）

「ヨタカは北海道に何羽いる？—夜行性鳥類の広域分布モデル—」* 河村和洋（北大・農）、山浦悠一（森林総研）、先崎理之（北大院・農）、藪原佑樹（北大院・農）、赤坂卓美（帯広畜産大）、中村太士（北大院・農）

「奄美大島のニホンミツバチの保全生態学的特性」* 藤原愛弓（東大院・農）、和田翔子（東大院・農）、鷲谷いづみ（東大院・農）

<生態系管理・外来種>

【最優秀賞】

「種数と面積の関係に生息地の質は影響するか？耕作放棄地の鳥類個体数推定からのアプローチ」* 埴岡雅史（北大・農）、山浦悠一（森林総研・植生）、山中聡、先崎理之、中村太士（北大院・農）

【優秀賞】

「カンムリカイツブリの繁殖に関するオオクチバスの間接的影響」* 伊藤楓（弘大・農生）、東信行（弘大・農生）

「寒い地域ほど在来植物は外来植物の影響を受けやすい？：オオハンゴンソウと在来植物群集の関係に注目して」* 市谷優太、赤坂宗光（農工大）

<行動>

【最優秀賞】

「フナにおける個性の形成：対捕食者行動の反応基準」* 児玉紗希江（放送大学/水研センター）、箱山洋（水研センター/東京海洋大）

【優秀賞】

「バツガがフンを蹴り飛ばす方向：オンブバッタにおけるフンけり行動」* 今坂亮介（九大院・シス生・生態研）、粕谷英一（九大・理・生物）

「交尾器形態の多様化をもたらす性淘汰の検出」* 高橋颯吾、高見泰興（神戸大・人間発達環境）

「流水環境下における移動コスト最適化を目指したチャネルキャットフィッシュの遊泳姿勢変化」* 吉田誠、佐藤克文（東大大気海洋研）

<動物個体群・動物生活史>

【最優秀賞】

「The impact of genetic variation in adaptive traits on population dynamics of a leaf beetle: an experimental test in a tree canopy」* 小野寺裕乃（北大・環境科学院）、内海俊介（北大・FSC）

【優秀賞】

「エゾシカ個体群の遺伝的空間構造の境界は障壁によってつくられるのか、距離による隔離なのか？」* 三澤桃、欧巍、山田敏也（北大・環境科学院）、齊藤隆（北大・FSC）、宇野裕之（道総研・環境科学研究センター）

「アリスイにおける卵の生存見込みと抱卵開始時期の関係」* 加藤貴大（総研大・先端科学）、松井晋、橋間清香、

土橋亮太、上田恵介（立教・理）

「成虫越冬するキタキチヨウの秋型雌を巡る夏型雄と秋型雄の移動戦略」*小長谷達郎、渡辺守（筑波大・院・生物）

<生物多様性>

【最優秀賞】

「RNA-seqを用いたアブラナ科植物内ウイルスの多様性の解明」*神谷麻里、永野惇、本庄三恵、工藤洋（京大・生態研）

「多様性の減衰に見る中立モデルとランダムレプリケーター方程式の相似性」*小林祐一朗、嶋田正和（東大・総合文化）

【優秀賞】

「菊池川水系におけるニッポンバラタナゴの遺伝的多様性」*甲斐桑梓（九大・農）、栗田喜久（九大・農）、川本朋慶（九大・農）、菅野一輝（九大・農）、皆川朋子（熊大・工）、鬼倉徳雄（九大・農）

「環境DNA分解速度の温度依存性」*辻冴月（龍谷大院・理工）、櫻井翔、山中裕樹（龍谷大・理工）

高校生ポスター

【最優秀賞】

「変形菌の研究 変形体の『自他』を見分ける力」*増井真那（東京都立小石川中等教育学校）

「デンジソウの就眠運動についての研究」*岩井楓、*大森文恵、清板香帆、松井千乃、横田知子（清心女子高等学校）

「ノコギリクワガタは幸屋火砕流を生き延びたか？～大隅諸島産ノコギリクワガタの多様性の秘密と亜種分類の妥当性～」*池田博和、*石井美帆、*梶原高騎、*崎山真菜、*谷山玲美、*縄司百香、*花里佳奈、*吉嶺薫乃、リヤ・アロラ（鹿児島県立国分高等学校）

【優秀賞】

「ネジバナのねじれの形成とその利点」*牧浩平、*佐藤匠悟、*佐藤匠、杉崎香穂、*白杵義侑、古谷綾乃（大分県立大分舞鶴高等学校）

「揖斐川水系支流におけるイワナとアマゴの属間雑種の解析」*丹羽大樹、*後藤暁彦、*三輪直生、石田瑞生、磯貝涼介、高木悠、*林俊輔、増田綾香、*村瀬希、浅野綾香、江崎正英、*神戸朱琉、*久富匡皓、*小島瑳希子、*後藤那月、*佐賀美月、澤田浩菜、*高山あまね、*前田晃太郎、*松井斗希、*森本早稀（岐阜県立岐阜高等学校）

「ブナ人工林は天然林より多くのCO₂を吸収するのか」*郷原雪枝、*國安里衣、*岡阪美心実（清心女子高等学校）

「高崎山ニホンザル群の情報伝達～ニホンザルの『餌撒き』を予測した行動～」*下郡正嗣、伊東陸、衛藤充正、*砥綿夕里花、*尾家晴子、*小川優希乃、三重野耕介（大分県立大分舞鶴高等学校）

「淡水産小型エビ類が夜行性である理由を探る—太陽光線が行動に与える影響—」*廣瀬太雅、石井学、上野裕之（俊成学園高等学校）

「里山の生物多様性の評価法の開発—愛媛県南宇和郡愛

南町を例として—」*佐藤恵、武田峻児、本多真士、橋本悠平、藤田竜輝、二宮翔太、田中秀直、橋越清一（愛媛県立南宇和高等学校）

【審査員特別賞】

「南日本における港のアリの地域間比較—外来アリのモニタリング」*水俣日菜子、*榎本茉莉亜、*西牟田佳那、原田豊（池田学園池田高等学校）

「高崎山ニホンザル群の情報伝達～『餌撒き』に関わるニホンザルの音声分析～」*下郡正嗣、*伊東陸、*衛藤充正、砥綿夕里花、尾家晴子、小川優希乃、三重野耕介（大分県立大分舞鶴高等学校）

「秋の渡りにおけるサシバの飛行戦略を解明！—愛媛県由良半島を例として—」藤田竜輝、田中秀直、*岡本周樹、*谷平淳、橋越清一（愛媛県立南宇和高等学校）

「アブラナ科植物の化学生態」*鈴木悠太、*伊藤悠揮、阿部正浩、田部瑞貴、青木菜々子（大阪府立住吉高等学校）

「植生の異なる環境でのバツタ類の種組成と多様度の比較」千代田創真（海城中学高等学校）

「静岡市巴川流域におけるカメ類の生息状況とアンケート調査について」服部智美、小田切佑樹、*宮城加菜、*佐野瑞姫（静岡北高校）

「カワニナを通して考える地域の生態系～国内外来種問題への提言～」*中山拓磨、*毛利匠、*森佳穂、*櫻井基樹（岐阜県立岐山高等学校）

「ミドリムシ培養における適正環境～未来を拓くミドリムシ～」*三重野耕介、伊東陸、衛藤充正（大分県立大分舞鶴高等学校）

【ナチュラルヒストリー賞】

「静岡市巴川流域におけるカメ類の生息状況とアンケート調査について」服部智美、小田切佑樹、*宮城加菜、*佐野瑞姫（静岡北高校）

「埼玉県内におけるアライグマの生息状況～爪痕調査から考えたこと～」*河野哲（私立海城高校）、*河野和（埼玉県立坂戸西高校）、*小林拓哉、*須藤祐太（埼玉県立蕨高校）、伊藤光太（埼玉県立越ヶ谷高校）、小野村梨穂（埼玉県立川越女子高校）、香川陸（埼玉県立所沢高校）、鈴木悠太（埼玉県立飯能高校）、和知瑛太（埼玉県立所沢西高校）

「汐川干潟に生息するベントスの生息状況の季節による変動」*加藤茜、*井上楽季、*高川夏輝、*坪井未裕、井上亮太（愛知県立豊丘高等学校）

「須ノ川公園の生物多様性とその保全—ニラバラを例として—」*安田彩里、*山下紗椰、橋越清一（愛媛県立南宇和高等学校）

「泉北高校ビオトープ池の完成後9年間の変遷」*横田真、*小林史哉、*島田明日斗、*下湯瀬夏生、*杉本拓生、*松岡瑠奈、*永嶋明良、木村進（大阪府立泉北高校）

「寺社の爪痕調査からみた新宿区における食肉目の生息状況」*角田周平、*河野哲、*縄田一樹、*沖田嵩樹、*吉野舜太郎、*大塚悠宇馬、*黒田峻平（海城中学高等学校）

「守れ！ふるさとのカスミサンショウウオⅥ」*前田晃太郎、*後藤暁彦、*丹羽大樹、*三輪直生、石田瑞

生、磯貝涼介、高木悠、*林俊輔、増田綾香、*村瀬希、浅野綾香、江崎正英、*神戸朱琉、*久富匡皓、*小島瑛希子、*後藤那月、*佐賀美月、澤田浩菜、*高山あまね、*松井斗希、*森本早稀（岐阜県立岐阜高等学校）

「三重県の海を守ろう -COD 分析とプランクトン観察」
*福永晴菜、*福永晴菜、*福永晴菜、*藤田侑樹、甲斐穂高、山口雅裕、平井信充（鈴鹿工業高等専門学校）
藤田侑樹、甲斐穂高、山口雅裕、平井信充（鈴鹿工業高等専門学校）
藤田侑樹、甲斐穂高、山口雅裕、平井信充（鈴鹿工業高等専門学校）

「クラゲの生態 -いろいろな音への応答反応-」*藤本真依子、*松田詩生、市村文音、山田茉莉、吉田有香（大阪府立住吉高等学校）

「神奈川のホタル系統解析 / ホタルの系統解析から見える里山と生き物の関係」神山雄生（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校）

「太平洋岸生態系調査 / 海岸の生き物調査から見える生物の生態と環境の関係」*城尾泰河、伊藤大輝、元川知歩、米岡克啓、佐藤奈緒、宮崎智葉、清水悠（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校）

「クラゲの生態 -いろいろな光への応答反応-」*秋田陽美、*辰巳綾理、天野紗里、中川綾香、川尻晴菜（大阪府立住吉高等学校）

英語口頭発表賞受賞者

< Award 1: Animal Ecology and Biodiversity >

【Best Award】

「A cryptic Allee effect: spatial contexts mask an existing fitness-density relationship」Terui A (Hokkaido Univ.), Miyazaki Y (KPMNH), Yoshioka A (NIES), Matsuzaki SS (NIES). A cryptic

【Excellent Award】

「Warming around optimal temperature of agricultural pest: response of the soybean aphid, and its possible impact」*Wang, Y. J. (National Taiwan Univ.), Nakazawa, T. (National Cheng Kung Univ.), Ho, C. K. (National Taiwan Univ.).

< Award 2: Plant Ecology and Plant-Animal Interaction >

【Best Award】

「Identification of triggering climatic factors contributed to General Flowering event in Peninsular Malaysia using remote sensing utilities」Azmy, M. M. (Tokyo Metropolitan Univ.)*, Numata, S. (Tokyo Metropolitan Univ.), Hosaka, T. (Tokyo Metropolitan Univ.), Mazlan, H. (Univ. Tech. Malaysia).

【Excellent Award】

「Long-term spatiotemporal dynamics of common and rare tropical tree species」*Sugiyama, A. (UCLA/FFPRI), Hubbell, S.P. (UCLA/STRI), Masaki, T. (FFPRI)

< Award 3: Evolutionary Ecology of Animals >

【Best Award】

「The evolution of sexual size dimorphism driven by two ontogenetic growth trajectories」*Chou, C. C. (Natl.

Cheng Kung Univ.), Iwasa, Y. (Kyushu Univ.), Nakazawa, T. (Natl. Cheng Kung Univ.).

【Excellent Award】

「Rapid evolution of a consumer stoichiometric trait destabilizes consumer-producer dynamics」*Yamamichi, M. (Kyoto Univ.), Meunier, C.L. (Umea Univ.), Peace, A. (Univ. of Tennessee), Prater, C. (Trent Univ.), Rua, M.A. (Univ. of Mississippi).

< Award 4: Applied Ecology >

【Excellent Award】

「After a century of intensifying human activities in subtropical lowlands - perspectives from historical and present bird distributions in Taiwan」*KO, Chie-Jen, LEE, Pei-Fen.

< Award 5: Ecosystem ecology >

【Best Award】

「Effects of CO₂ enrichment on calcareous sessile epifauna on seagrass bed in Akkeshi-ko estuary, Hokkaido」*Minako ITO, Masahiro NAKAOKA (Hokkaido Univ.).

【Excellent Award】

「Stable isotope analysis of trophic dynamics and terrestrial food web compartmentalization in lizard communities in Madagascar」*Kawai, U. (Texas Tech Univ.), Perry, G. (Texas Tech Univ.), Horita, J. (Texas Tech Univ.), Hori, M. (emeritus), Mori, A. (Kyoto Univ.).

Ⅱ. 書評依頼図書 (2014年9月～2015年3月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. ピーター・クレイン著 矢野真千子訳「イチョウ奇跡の2億年史」(2014) 440pp. 河出書房新社 ISBN:978-4-309-2530-2
2. 梶光一・土屋俊幸編「野生動物管理システム」(2014) 252pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060227-3
3. 石原元著「今西錦司-そのアルピニズムと生態学-」(2014) 250pp. 五曜書房 ISBN:978-4-434-19826-7
4. 伊沢紘生著「新世界ザル(上)」(2014) 432pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063339-0
5. 占部城太郎編「湖沼近過去調査法 より良い湖沼環境と保全目標設定のために」(2014) 244pp. 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05735-7
6. 西條辰義監修・亀田達也編著「フロンティア実験社会科学6『社会の決まり』はどのように決まるか」(2015) 202pp. 勁草書房 ISBN:978-4-326-34916-6
7. 渡辺守著「トンボの生態学」(2015) 262pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060196-2
8. 藤崎憲治著「絵でわかる昆虫の世界 進化と生態」(2015) 198pp. 講談社 ISBN:978-4-06-154769-8
9. 日本生態学会編 森田健太郎・池田浩明担当編集「現代の生態学3 人間活動と生態学」(2015) 260pp.

- 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05743-2
10. 黒倉寿編「水圏の放射能汚染 福島の水産業復興を目指して」(2015) 186pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1484-6
 11. 中村徹編著「森林学への招待(増補改訂版)」(2015) 176pp. 筑波大学出版会 ISBN:978-4-904074-36-7
 12. 大黒俊哉・吉原佑・佐々木雄大著「草原生態学 生物多様性と生態系機能」(2015) 170pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062225-7

Ⅲ. 寄贈図書

1. 「海洋地図 No.84 (CD) 種子島付近表層堆積図」(2014) 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
2. 「うみうし通信 No.85」(2014) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
3. 「第30回国際生物学賞」(2015) 36pp. 国際生物学賞委員会
4. 「国際生物学賞30年の歩み」(2015) 162pp. 国際生物学賞委員会
5. 「公益財団法人 山田科学振興財団事業報告書 2013年度」(2015) 138pp. 公益財団法人山田科学振興財団
6. 「Journal of Environmental Information Science」(2015) 140pp. 環境情報科学センター
7. 「国土技術政策総合研究資料 緑化生態研究室報告書第29集」(2015) 140pp. 国土交通省国土技術政策総合研究所
8. 「うみうし通信 No.86」(2015) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

- (1) 公益財団法人住友財団 2015年度環境研究助成
 - ①理学(数学、物理学、化学、生物学)の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの(それぞれの分野における工学の基礎となるものを含む)。若手研究者。
 - ②総額1億6,000万円(1件当たり最大500万円)90件程度
 - ③2015年6月30日(火)※E-mailの締切は6月16日(火)
 - ④公益財団法人 住友財団
- (2) 公益財団法人住友財団 2015年度基礎科学研究助成
 - ①一般研究:環境に関する研究(分野は問いません) 課題研究:2015年度募集課題「喫緊の環境問題解決のための学際研究または国際共同研究」
 - ②総額1億円

一般研究 8,000万円(1件当たり最大500万円)50件程度
課題研究 2,000万円(1件当たり最大1,000万円)2件を予定

③2015年4月15日(水)～6月30日(火)※E-mailの締切は6月16日(火)

④公益財団法人 住友財団

(3) 第7回(平成27年度)とうきゅう環境財団社会貢献学術賞

①日本の環境分野において学術的かつ社会的に特に顕著な業績を挙げた研究者

②賞状および賞金50万円

③平成27年8月31日(必着)

④日本生態学会事務局(学会推薦が必要です)

書評

根本正之著(2014)「雑草社会がつくる日本らしい自然」築地書館 208pp. ISBN:978-4-8067-1472-9 定価2000円(税別)

本書タイトルにある「日本らしい自然」とは、「アジアモンスーン地帯の東の縁につらなる列島という地域と、そこに古代から住みつき自然と共存してきた日本人とのあいだにかもしだされた特性」と著者により定義されている。谷津田などの半自然生態系がその例である。また、本書の定義する「雑草」とは、「庭や田畑や空き地や土手に自然に生えてくる草」であり、農耕地だけでなく非農耕地(都市緑地や河川堤防、道路路面など)に生育する草本種も含まれている。むしろ後者が本書のメインである。

本書は、日本人の雑草観、身近な雑草と雑草社会(群落と同義)の生態、そして日本らしい自然の再生を論じた普及書である。このような学際的に雑草を考えることができる点が本書の特色の一つである。

以下に、各章の内容を紹介し評者の感想を付記する。第1章では、日本の景観の特色や日本人の雑草観の歴史の変遷を論じ、「日本らしい自然」についての考察を行っている。特に、雑草観の話は弥生時代から中世、江戸時代を経て現代にまで及んでおり、読みごたえがあった。また、本章内では、雑草や在来草原生植物のイメージについてアンケートした結果も幾つか紹介されており、雑草に対しての人々がどのような印象をもつのかを考えるよい機会となった。

第2章では、土地利用・管理と雑草種組成の関係および雑草(主に耕地雑草)の生活史が紹介されている。特に種子生態に関する情報は豊富である。第3章では、非農耕地の雑草種を主な対象とし、雑草群落構造に強い影響を及ぼす優占種の生態的特性が説明されている。特に、攪乱後の再生力や生産構造、著者が考案した生育型戦略などが詳述されている。また、遷移や攪乱に伴う群落構造の変化についても解説されている。これら2、3章は、

雑草・草地生態学、植生科学に関する知見を復習となる上でも価値がある。

第4章では、外来植物の侵入経路や生態的特性、そして、ナガミヒナゲシやセイヨウタンポポなどの種の個々の生態が紹介されている。侵入経路は年代別に解説されている。例えば、1950年代～70年代は輸入穀物や羊毛への混入が主な侵入経路であったが、1990年代～現在では園芸利用からの逸出が主であるという。外来植物の侵入パターンを理解する上で、侵入年代がいかに大切かを知る上でよい内容である。

第5章では、河川堤防や都市緑地における、在来雑草を用いた植生の再生が論じられている。中でも、隅田川や利根川、鳴瀬川の河川堤防で小学校や中学校の児童らと共に実際に行われている、在来雑草群落の再生の試みを詳しく紹介している。河川堤防という自然環境は全国各地に存在し、堤防上には草原生の在来雑草が残存していることがしばしばある。著者の指摘するように、一定の手続きを踏めば身近で誰でも（自然再生）活動できる場所と思われ、河川堤防をベースとした自然再生事業は日本国内に広がっていくこと可能性を感じさせる内容であった。自然再生に興味のある方には知っていただきたい内容である。

総評として、本書は、雑草を多角的に学ぶ上で適当な書といえる。雑草学や植生科学、草地生態学を研究する学生や、自然再生や植生管理に興味のある方は一読し、議論を深めることをお勧めする。

(東京農工大学 斎藤達也)

近藤敬治著 (2013)「日本産哺乳動物毛図鑑 走査電子顕微鏡で見る毛の形態」北海道大学出版会 231pp. ISBN:978-4-8329-8211-6 定価 6480 円 (税込)

哺乳類の生態研究において、種同定は重要な技術である。生物学の進展により、毛・糞・唾液（たとえば採食物の食べ残しに付着したもの）から遺伝子指紋（genetic fingerprint）を取り出し、同定することも可能である。ただ、評者のようなフィールドワーカーは、もっと気軽に同定したいと考えるのが普通であるだろう。そこで、哺乳類が残した痕跡、すなわちフィールドサインはその手掛かりとなる。フィールドサインの代表格としては、

足跡や糞、そして毛などが挙げられる。足跡や糞に関して、その形態的な特徴を種毎に解説する書籍や図鑑は、市民向けの一般図書も含め、近年徐々に増えつつある。しかし、意外にも「毛」についての体系的な情報は限られており、国内外の個別の論文や報告書から採り出すことが求められるケースもしばしばであった。

本書は3部構成である。第I部「毛の基本構造」では、毛の形態的特長を示す用語の紹介や、毛の密度や換毛（生え代わり）に関する解説がなされている。第II部「標本と観察方法」では、同書と同じ方法で毛を観察するために必要な材料と手順が紹介されている。評者のような初学者には、保護毛の縦断方法など、非常に有用な解説である。本書のメインとなる第III部「日本産哺乳類の毛のSEM像」では、日本に生息する48属53種（翼手類を除く）の哺乳類の保護毛と下毛の形態について、走査電子顕微鏡（SEM）によって撮影された写真と解説が掲載されている。写真は、保護毛と下毛のそれぞれ3～4部位、そして保護毛の断面が収録されており、同定する際の手掛かりとなる。

こうして網羅的に哺乳類の「毛」を眺めて、種間の形態の差異に注目してみると、その生物種と生息環境とのかわりにも目を向けたくなる。水生適応か、地中も利用する種か、寒冷地適応した種か。生活環境や行動様式の差異は、毛の構造に少なからず反映されていることがよくわかる（生物種によってはその解説も本書に掲載されている）。そしてこれが結果的に種同定の手掛かりにもなる。一方で、近縁種で、生息環境も類似する種間の場合、毛の形態が類似する種（少なからず初学者の評者からみれば差異を見出しにくい種）も少なからずあり、毛からの同定の限界を理解することも重要であるだろう。

本書において、毛を同定するための検索表が添付されておらず、種同定を目的とした本書のユーザーにとっては唯一不満の残る点かもしれない。しかし、この課題を差し引いても、他に類を見ない網羅的な図鑑である本書の価値は高く、関連する研究室にはぜひお勧めしたい。アカデミックな視点を抜きにして、毛の持つ生物の造形美を鑑賞するだけでも楽しめる一冊である。

(山形大学農学部 江成広斗)

・公募カレンダー

例年学会事務局に送付される学術賞、研究助成、共同研究などの公募を昨年の締切日順にまとめました。
詳細については、学会事務局あるいは各団体にお問い合わせ下さい。

名称又は種類	授賞又は助成団体	2014年締切 (*印:2015年締切)
研究・活動助成	公益財団法人 とうきゅう環境財団 http://www.tokyuenv.or.jp/invite	1月15日*
藤原賞	公益財団法人 藤原科学財団 http://www.fujizai.or.jp	1月31日*
自然科学研究助成	公益財団法人 三菱財団 http://www.mitsubishi-zaidan.jp	2月3日*
研究援助	公益財団法人 山田科学振興財団 http://www.yamadazaidan.jp	2月27日*
女性研究者奨励 OM 賞	公益社団法人 日本動物学会 http://gakkaisho.zoology.or.jp/entry/	3月31日
環境問題研究助成	公益財団法人 ニッセイ財団 http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp	4月6日*
学術振興会賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/	4月15日*
国際生物学賞	日本学術振興会国際生物学賞委員会 http://www.jsps.go.jp/j-biol/index.html	4月15日*
研究助成	公益信託 四方記念地球環境保全研究助成基金 http://www.jwrc.or.jp	5月7日
生物多様性みどり賞	公益財団法人イオン環境財団 http://www.midoripress-aeon.net/jp/	5月31日*
育志賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html	6月12日*
環境研究助成	公益財団法人 住友財団 http://www.sumitomo.or.jp/	6月23日
奨励研究助成	公益財団法人 ロッテ財団 http://www.lotte-isf.or.jp	6月29日*
遠山椿吉記念、食と環境の科学賞	一般財団法人 東京顕微鏡院 http://www.kenko-kenbi.or.jp/	6月30日
文部科学大臣表彰科学賞	文部科学省研究振興局 http://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/index.htm	7月17日
研究者育成助成	公益財団法人 ロッテ財団 http://www.lotte-isf.or.jp	7月21日*
朝日賞	財団法人 朝日新聞文化財団	8月29日
尾瀬賞	財団法人 尾瀬保護財団	8月31日
助成事業	公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会 http://www.expo-cosmos.or.jp/	9月17日
記念基金助成	独立行政法人 日本万国博覧会記念機構 http://fond.expo70.or.jp/	9月30日
沖縄研究奨励賞	公益財団法人 沖縄協会 http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/	9月30日
木原記念財団学術賞	公益財団法人 木原記念横浜生命科学振興財団 http://www.kihara.or.jp	9月30日
科学技術賞	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月10日
研究助成	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月10日
環境研究総合推進費	一般財団法人 日本環境衛生センター http://www.env.go.jp/policy/kenkyu/index.html	11月6日
研究助成	公益財団法人 鹿島学術振興財団 http://www.kajima-f.or.jp/	11月10日
新 LRI 研究課題募集	一般社団法人 日本化学工業協会 http://www.j-lri.org/	11月14日
研究助成	公益財団法人 下中記念財団 http://www.shimonaka.or.jp/	12月10日



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2015 (平成 27) 年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける 2015 年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

1. プロジェクト

大型共同研究としては、流動連携機関である総合地球環境学研究所 (地球研) との共同企画プロジェクト「生物多様性が駆動する栄養循環と流域圏社会 生態システムの健全性」(研究代表者: 奥田 昇) が始動している。また、「自然条件下における生物同調現象」(研究代表者: 工藤 洋) (科学研究費補助金、基盤研究 S) がスタートした。これらのほか、地球研との環境省環境研究総合推進費による共同研究 (1 件)、科学研究費補助金による研究 (10 件)、JST 戦略的国際科学技術協力推進事業 (1 件)、融合チーム研究プログラム (SPIRITS) (1 件)、国立極地研究所研究プロジェクト (2 件)、民間財団寄付金による研究 (8 件) など進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員 (Affiliated Scientist) を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業 (次頁の表を参照)

2015 年度の共同利用・共同研究事業として、分野間の交流や若手研究者育成の観点から、3 件の共同研究、6 件の研究集会・ワークショップを採択した。開催日程

などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度 (第三金曜日) センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室 (会場への道順は、センターのホームページ参照) の予定である。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に 3 回 (7 月、11 月、3 月) 発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

京大附置研究所・センターの一般公開イベント「京大ウィークス」に時期を合わせ、一般公開「授業で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。また、大学院入試案内のためのオープンキャンパスも開催の予定。日程などはいずれもセンターホームページに掲載する。

7. 共同利用施設

大型分析機器: DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置 (元素分析計)、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置 (熱分解型元素分析計)、GC/C (ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)、LC/C (高速液体クロマ

トグラフ付き前処理装置)を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus、PreCon-GasBench II (自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス)、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置(元素分析計)、GC/C(ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)を装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage、水の酸素・水素同位体比分析前処理装置(水平衡装置)とGC/C(ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)を装備した安定同位体比質量分析計 MAT252 の計3台。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼動しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地(下阪本)に係留されている。

シンバイオトロン：ズートロン、アクアトロン、水域モジュールが利用可能である。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CERの森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤

安定同位体関係：中野

観測船関係：中野

シンバイオトロン関係：高林

実験圃場林園関係：川北

8. 協議委員会、運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

平成 27 年度 共同研究・研究集会・WS 採択申請一覧			
畑 啓生	愛媛大学大学院理工学研究科	共同研究 a	絶滅危惧種と国内移入種との交雑と遺伝子浸透：希少種の保全に活かす SNPs による遺伝子型判定
木下 哲	横浜市立大学・木原生物学研究所	共同研究 a	Ecological study of epigenetic memory of winter in Brassicaceae
保原 達	酪農学園大学・農食環境学群環境共生学類	共同研究 a	埋没腐植土層の微生物多様性とその生息環境
陀安一郎	総合地球環境学研究所・研究高度化支援センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2015
中野伸一	生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 琵琶湖
辻 和希	琉球大学農学部	ワークショップ	進化と生態の階層間相互作用ダイナミクス：生態学のリストラ 2
日浦 勉	北海道大学・北方生物圏フィールド科学センター	ワークショップ	生物・生態系情報の統合と活用：長期変動の検出と時系列データの正しい見方
水田 拓	環境省・奄美野生生物保護センター	研究集会	奄美群島自然史学—亜熱帯島嶼の生物多様性を研究する—
吉田弥生	京都大学・野生動物研究センター	研究集会	2015 年度 勇魚会シンポジウム「海棲哺乳類の分子生物学」

センター関係者の動き

- 1) 研究員の土岐和多瑠氏が、3月31日付けで退職しました。
- 2) 特定助教(白眉センター)の塩尻かおり氏が、4月1日付で龍谷大学へ転出しました。
- 3) 清水加耶氏が、4月1日付けで研究員に採用されました。
- 4) William Antony Nicholas Dodd 氏 — (ブリストル大学(イギリス)・講師)が、招へい研究員(客員)として6月29日～10月2日まで滞在予定です。
- 5) 清水健太郎氏 — (チューリヒ大学(スイス)・教授)が、招へい研究員(客員)として7月5日～11月30日まで滞在予定です。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費および地区会費の合計を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：一般社団法人日本生態学会

退会する際は前年12月末までに退会届を事務局まで提出してください（ウェブサイトにて申込フォーム有り）。
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	年会費* (保全誌購読者**)	大会発表	総会・委員 (選挙・被選挙権)
正会員（一般）	11000円 (13000円)	○	○
正会員（学生）	8000円 (10000円)	○	○
賛助会員	22000円	×	×

*生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

**非会員の方の保全誌定期購読料は年額5000円です。
なお、保全誌は発行後2年間、オンラインアクセスができません

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 正会員・保全誌定期購読者のみ有
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子を必要としない（オンラインアクセスのみの）会員への割引】

- ・日本生態学会誌 600円
- ・Ecological Research 900円

既会員の方が今後申請される場合は、割引を受けたい年の前年10月末までに問い合わせページを通じて事務局へご連絡ください。

新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年より適用されます。

地区会費

正会員は、住所（所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう）により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区（200円）：北海道
- ・東北地区（600円）：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区（400円*）：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区（0円）：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区（400円）：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中・四国地区（400円）：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区（700円）：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

*ただし当面は徴収しない

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

Tel&Fax 075-384-0250 <http://www.esj.ne.jp/>

※お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。